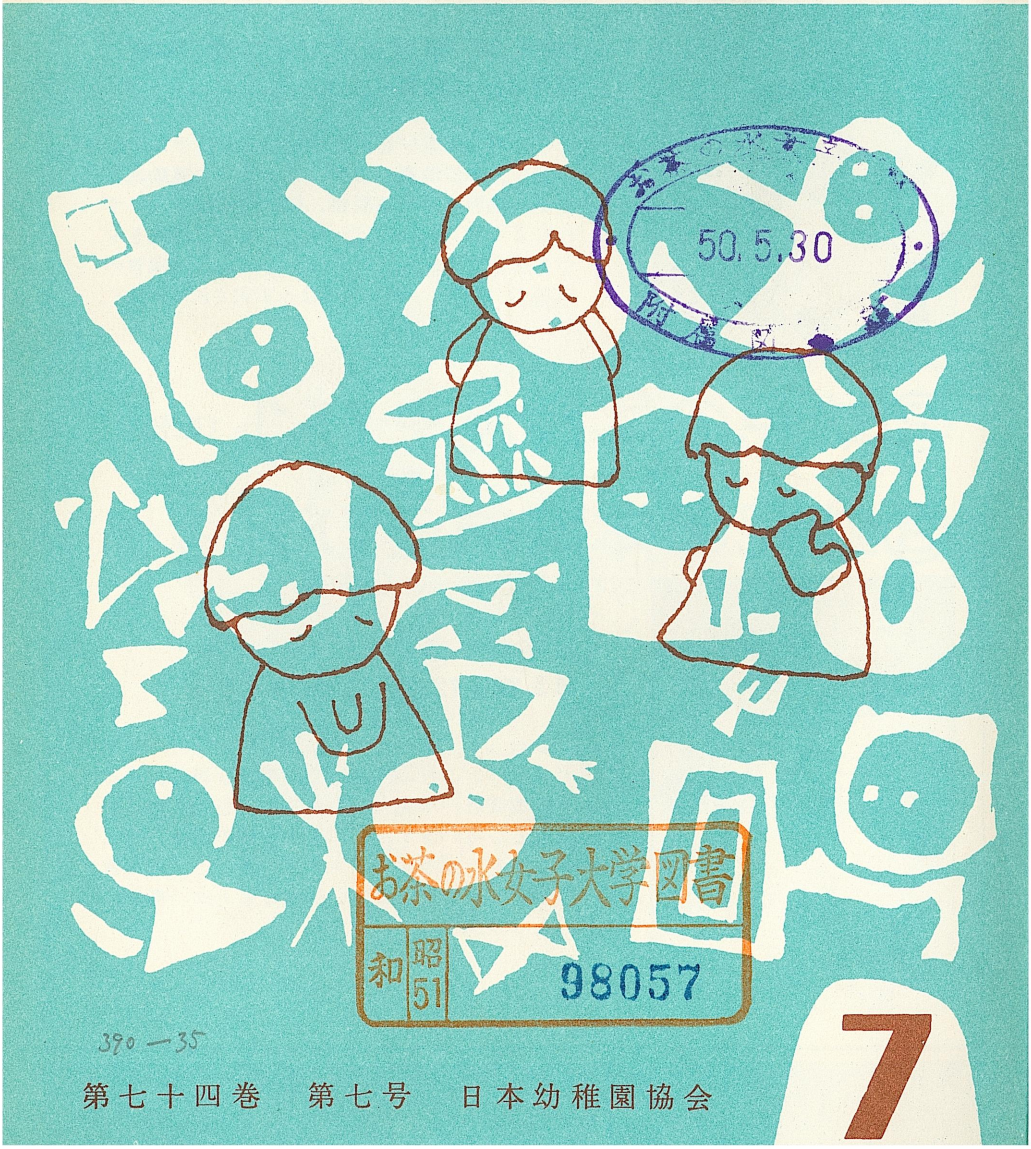
家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

N24
1
74(2)1



50.5.30
阿倉
お茶の水女子大学図書
和 昭51
98057
390 —35

7

第七十四巻　第七号　日本幼稚園協会

新シリーズが誕生しました!!

保育者のための

保育実技シリーズ

★日々の保育指導にすぐに役立つよう工夫されています。

①うたであそぼう

中村 明・早川史郎・関口 準 共著
B5判・128頁 1,000円

子どもの音楽遊びを、歌唱中心から、手あそび、おどり、楽器演奏、音楽に合わせての運動遊びなどに発展させた解説書。掲載の32曲は、いずれもよく知られた曲ばかりで、子どもの動きを示す豊富な図説と、ていねいな解説は、保育の現場で、指導の参考になるよう工夫されています。

②幼児の体育あそび1 (近刊)

マット・ボール編

③幼児の体育あそび2

なわ・平均台・とび箱編

三宅照子著
B5判・128頁 1,000円

「なわ」、「平均台」、「とび箱」の3つの遊具をとり上げ、これらの遊具を利用しながら、子どもの敏捷性、瞬発力、巧緻性などを培うことを目的としています。子どもの心理の把握、導入のしかた、実際面での注意すべきこと、保育者の心がまえなど、豊富な図説をもとに、微細にわたり解説されています。

(以下続刊)

くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所・本社営業課 TEL 東京(03) 292－7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

幼児の教育

第七十四巻　第七号

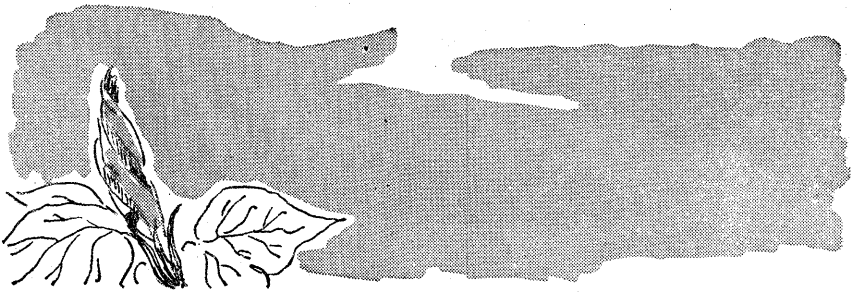
幼児の教育　目次

——第七十四巻　七月号——

表紙　三好碩也
カット　中島英子

©1975
日本幼稚園協会

幼児期における平和教育……荘司雅子…(4)
公立小学校普通学級に入学した
　五人の全盲児（その一）……小柳恭治…(8)
遊びをめぐる夢想（その三）
　—「まれびと」の位置—……本田和子…(14)
うたのこころ……浅野千鶴子…(21)
幼稚園真諦—倉橋惣三選集より—……八坂富子…(24)
　江波諄子
高校生と保育—授業の中より—……三好美那…(28)



☆講演

革新するアメリカの保育……児玉　省…(32)
幼な児をはぐくむ自然……室谷幸吉…(47)
私の保育……平野信子…(50)
〃始まり〃と〃初め〃……渡辺祝子…(54)
保育の心の初め……中村美智子
始まり……赤間峰子
公平について……津守　真…(57)
おい抜かされる喜び……福井達雨…(60)

幼児期における平和教育(1)

荘司雅子

アメリカのコロンビア大学に事務局をもつWCCI（世界カリキュラム指導協会）の主催で、昨年九月八日から十八日まで、イギリスのキール大学で世界教育会議（World Conference on Education）が開かれた。私はアジア地域を代表し、運営委員の一人として、また幼児教育部会の司会者として出席を要請された。WCCIというのは世界的な規模で共通の教育方法やカリキュラムを考えていこうという主旨で発足した世界教育協会である。この度の会議の主題は〝平和のための教育〟Education for peace であった。三〇数ヵ国から約三〇〇名の教育学者・教育心理学者・教育社会学者・教育実践家及び教育行政家たちが参加され、世界平和のための教育について討議した。十日間の会議中、一日の学校訪問と一日の観光以外は、毎日朝九時から夜十時まで、全体会議と各部会のスケジュールがぎっしり組まれ、参加者一同息つく間もないぐらいであった。全体会議は主として平和のための教育というテーマの基調になる講演やパネルディスカッションで、それは会期中四回行われた。その他の時間はほとんど各部会にわかれての討議に費された。部会は、幼児教育（就学前教育）・小学校教育・中等教育・大学教育及び成人教育・校外教育の五つであった。参加者は全部各自の希望のグループに所属して、平和教育のプログラムと資料、カリキュラムに関する評価と研究及びそれを実施するための基礎理論などについて討議した。私は幼児教育部会の運営の責任者として、いかにこの討議をすすめればよいかについて、あらかじめ考えた。幼児部会のメンバーはフィリピン、ナイジェリア、ノールウェイ、西ドイツ、メキシコそしてアメリカなどの大学の幼児教育担当者や教育行政家であった。平和のための教育は、まず幼児期からという共通のイデーをもって参加された方々ばかりである。しかし、現実ではどこの国もまだそうした視点でプログラムや指導などを計画してはいない。そこで私はまずこれらを討議していく基本資料といったものを用意して、幼児部会のメンバーに配った。たとえば一九七二年にパリのユネスコ

本部から出版されている『学校の生涯教育』の〝就学前教育と初等教育〟の章と〝〇歳から三歳児〟("Pre-school and elementary school", "Infancy to three years of Age", The School and Continuing Education, UNESCO, Paris 1972) に出ているフロイド心理学者が強調していることをあげた。すなわち人間の幼児期には、先天的に備わっている闘争本能があること、そしてこれが後年の精神的な健康面や物事に適応しようとする努力を妨げるものであるといっている。またピアジェが指摘している幼児期の経験のもつ重要性なども同書にのっているのである。また教育社会学者ハヴィガーストの著作『人間の発達課題と教育』に出ている幼児期の発達課題なども資料として出した。更にペスタロッチやフレーベルらの教育学者の著作にある幼児教育論、現代のアメリカの幼児教育者の研究による幼児期にあらわれている差別、人間関係への関心などに関する資料を幼児教育部会の参加者に配り、幼児期の平和教育を考える基本資料にした。

平和教育は、今や世界的な問題になっているが、この問題はまず幼児期に始めなければならないことが、心理学者や社会学者によって強調されている。しかしこれは考えてみると、既にスイスの大教育者であるペスタロッチが、「ゲルトルートはいかにしてその子を教えるか」という書物の第一三信に平和の心の芽生えは、母の影響に始まると次のように書いている。

〝わたしは自分に尋ねる。どうしてわたしは人間を愛し、人間に感謝し、人間に従順になるのか——人間に対する愛、人間に対する感謝、人間に対する信頼の根底になくてはならない感情および人間らしい従順を育くむ能力は、どうしてわたしの本性のなかにあらわれてくるのかと。そしてわたしはそれらが主として幼児と母との関係から生じてくることを知る。

母は子どもを育くみ、養い、守り、そして喜ばせずにはおれない。母はそうして子どもの要求を満たし、子どもにとって不快なものを遠ざけ、何もすることのできない子どもを助ける。子どもは哺(はぐく)まれ、喜び、愛の芽は、子どもの心の中に成長する。子どもがまだ見たこともないものが、子どもの目の前にあらわれると、子どもは驚き、恐れ、泣く。母が子どもをしっかり胸に抱き、子どもと戯れ、気を晴れさせると、子どもは泣きやむ。けれども子どもの目はなおいつまでも涙でぬれている。またおなじものがあらわれる。—母はまたもや子どもをかばって抱いてやり、もう一度子どもに向かって微笑(ほほえ)む。子どもはもう泣かない。子どもは明るい目で母の微笑に報いる。——信頼の芽は子どもの心の中に成長する。子どもが要求するたびに、母はその揺りかごに急いでゆく。飢(ひも)じいときにはそこへ行き、渇(かわ)いたときには飲ませてやる。

母の足音を聞けば、子どもは静かになり、母を見れば、手を差し延ばす。母の胸に抱かれて、子どもの目は輝き、子どもは満足する。母ということと満足ということとは、子どもにとってまったく同じと考えられる。――子どもは感謝する。

愛情と信頼と感謝との芽はたちまち広がる。子どもは母の足音を知り、母の影に微笑み、母に似た者を愛する、母に似た者は彼にはよいものだ。子どもは母の姿に向かって微笑み、人間の姿に向かって微笑む。母が愛する者は子どももまた愛する。母が胸に抱く者は彼もまた抱く。母が接吻する者には彼もまた接吻する。人間愛の芽・同胞愛の芽は子どもの心の中に成長する"。（長田新編「ペスタロッチ全集」第八巻）

ペスタロッチに次いで、幼稚園の創立者であるフリードリヒ・フレーベルは、一八四四年に『母の歌と愛撫の歌』(Mutter=und Kose=lieder)をあらわし、世の母親や幼児教育者に、歌や遊戯を通して子どもに平和の心、愛の心、感謝の心、信頼の心を育てなければならないことを教えている。その一節に次のようなものがある。

坊やいたしましょう
お菓子を焼きましょう
ぴちゃぴちゃお菓子をたいらにしよう
パン屋さんがいってる。さあよろしい
すぐにお菓子を持っといで
急がにゃかまどが冷えますぞ
パン屋さん、上等のお菓子です
小さい坊やに焼いてください
すぐにお菓子は焼けましょう
かまどの奥へ入れますよ

フレーベルは、この遊戯をするとき、子どもにただ歌わせたり踊らせたりするだけではなくて、母なり教師なりが、神と自然と人間とのつながりを自覚しながら子どもと遊戯をすると、知らず知らずの間に子どもに愛の心、感謝の心、信頼の心をはぐくむことができるといっている。子どもはパンや菓子が好きであるから、母はそれを子どもにあたえたい。そのパンを題材とする遊戯を通して、子どもは神と人と物とのつながりを知り、そこに愛と感謝の心がはぐくまれる。

さてパンは子どもが母の手からうけ取る前に、まず焼かれなければならない。そこで町のパン屋が母の愛と子どもの望みとを媒介するということを、この遊戯で母は子どもに知らせることができる。そしてパン屋がパンを焼くには粉屋が粉を挽かなければならず、粉屋が粉を挽くには農夫が小麦を持ってこなければならな

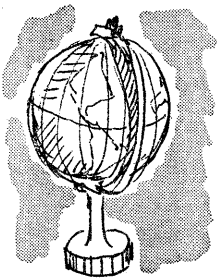
い。さらにまた田畑に小麦が実らなければ農夫は小麦を持ってくることができない。田畑に小麦が実るには自然がよく調和して働いてくれなければならない。自然が調和して働くことのできるのは、神の愛が力をあたえ材料をあたえ、すべてのものをその目標へと導かなければならない。こうしてフレーベルは、われわれは「パン焼き」の遊戯を通してすべてのものは調和のとれた一つの大きな共同体であるということを、知らず知らずの間に子どもに感得させることができるという。このようにして子どもはしだいしだいに人を愛し、神を愛し、人に感謝し、神に感謝することを覚え、やがては平和のたいせつさを知る。

この歌と遊戯だけではなくて、この書のすべての絵や歌や遊戯は同じように幼児の心を育てるためのものである。たとえば「オオカミとイノシシ」というたけだけしい動物の絵と歌の場面でも、フレーベルは親や教師に、動物の生活のあり方と人間の生活のあり方を教えなければならないと述べている。人間のうちでも時にはこのような猛獣と同じように野卑な欲望がはげしくあらわれるが、それは幼児のやさしい心に強烈な印象をあたえるので、よく教えておかなければならない。だから幼児の神経や想像力が強い刺激を受けすぎているときは、できるだけ幼児の幻想を純粋なままに、幼児の羞恥心を傷つけないようにすることがたいせつである。とかく、大人の不注意な言葉によって幼児の眠っている誤解をよびさますことがある。幼児といえども動物は人間よりも知識が劣っているということを知ることができる。人間は自分の行為を知り、また知るべきである。子どもといえどもそれを知るべきである。以上のようなことをフレーベルは述べながら親や教師は子どもが動物の世界にもたけだけしいのがあるが、やさしいのもある。植物の世界などはたいてい健康で、快活な生活をし、それぞれの働きをしているから、私たち人間はそれをやたらに妨げないとさとしたり、まして人間はお互いに仲よくそして自分々々の天職と使命に忠実に生活しなければならないことを子どもに教えなければならないと述べている。

このように、フレーベルはたとえ、特に平和のための教育を幼稚園教育に直接述べていないとはいえ、平和教育の基本的な概念を、彼の書物に、また彼が創作した方法―たとえば、遊戯・歌・物語、教育玩具（恩物）の中に見いだすことができる。二〇世紀の今日において幼児期における平和教育を考える時、私たちは、フレーベルの幼児教育に関する思想と方法とを抜きにしては考えられないと思う。

公立小学校普通学級に入学した五人の全盲児（その一）

小柳恭治



一、画期的な出来事

この四月に公立小学校の普通学級に、五人の全盲児（東京都で二人、埼玉県で三人）が入学しました。五人のうち四人までが未熟児網膜症によって失明した子どもたちであり、この四人が普通の幼稚園を卒園しております。また、幼稚園に入園する前は、小さなころから東京都心身障害者福祉センターで訓練を受けてきました。

私立小学校には、現在すでに一人の全盲の女の子（四年生）が普通学級に在学しておりますし、また公立の小学校にも弱視学級にはこれまでも二、三人の全盲児が在籍しており、そのうちの一人はこの四月に公立中学校の普通学級に進みました。

しかし、公立小学校のしかも普通学級に、全く目の見えない子どもたちが入学し、普通児といっしょに教育を受けることになったのは、今回が初めてです。その入学のいきさつは子どもによってまちまちですが、これまでの実績、とくにいま述べた私立の小学校（東京都、M学園小学校）の普通学級における全盲児Kちゃんの事例が一つのきっかけなったことは確かです。四月七日付の朝日新聞の夕刊にも、

全盲の子明るい門出
公立普通小に入学
東京と埼玉で五人
私立の実験が呼び水

といった見出しで大きく報道されましたので、記憶されている方も多いかと思います。

もちろん、両親の熱意、そしてこれまで二年間、普通児といっ

写真1

上　東京都町田市M小学校の入学式
　　全盲のN君も新入生の一人
左　〝ホラ，校長先生の顔は，こういう顔だぞー〟
　　(1975・4・7)

しょに教育をしてこられた幼稚園の先生方の努力、さらには教育委員会や学校関係者の理解がなければ、とうてい実現しなかったことでしょう。

東京都町田市立M小学校の校長先生は、入学式でのお母さん方に対する挨拶の中で〝子どもたちには個人差があり、一人ひとりがみな異なった能力・特性をもっている。その個人差に応じた教育をすることが必要である。N君は目が見えないという点でほかのお子さんとは違っているが、しかし目が見えないということに対して、それを補う配慮をするならば、N君はみんなといっしょに元気に学校生活を送っていくことができるであろう。これがN君に対する個人差に応じた教育のしかたであり、障害をもった友だちにみんながあたたかい思いやりをもち、またN君はそれに甘えずにがんばっていくことをわれわれ教師は期待している。このような人間教育をめざしている本校に、わが子を入れたことにお母さん方は誇りをもっていただきたい〟といった趣旨のお話をされました。(写真1)

多くのお母さん方は、この校長先生のお話に深くうなずいておりました。もちろん、〝ここは普通児のための学校だ……、盲学校じゃない〟ということで、納得のいかないお母さん方もいたと思いますが、やがては理解していただけるでしょう。

この学校では、教育目標を達成するための基本方針の一つとして、「心身障害児教育について研究を深め、教師・児童・父母が一体となって、一人ひとりを大切にする教育のあり方について理解を深める」ことを今回、明確に打ちだしました。そして実際にN君が入った学級の担任を二人にするなど、いろいろと配慮がなされております。

ともあれ、全盲の子どもが公立小学校の普通学級へ入学したということは、わが国の盲教育の近年の歴史の中ではかつてなかったまさに画期的な出来事なのです。もちろん、いまの段階では予測し得ない壁にもいろいろとぶつかるかもしれませんが、関係者の努力によりそれらは克服していかなければなりません。もしも失敗するようなことがあれば、普通学校における盲児の教育はこしばらくは望むべくもありません。

二、現在、法的には

ところで現在、盲児を普通学校に就学させることは、法的には違反なのです。ちょっと話がかたくなりますが、学校教育法第七一条（昭三六、法律一六六・一部改正）によれば、盲学校は「盲者（強度の弱視者を含む）に対して、幼稚園、小学校、中学校又は高等学校に準ずる教育を施し、あわせてその欠陥を補うために、必要な知識技能を授ける」ことを目的としており、さらに学校教育法第七一条の二（昭三六、法律一六六・追加）で、その盲者の「心身の故障の程度は、政令で、これを定める」となっております。その政令、つまり学校教育法施行令第二二条の二（昭三七、政令一一四・追加）によれば、盲者とは「両眼の視力が〇・一未満のもの……」というふうに規定されており、これにもとづいて昭和三七年に、〃メガネをかけてもなお両方の眼で見た視力が〇・一未満のものは盲学校において教育するよう、その趣旨の徹底を図られたい〃という通達（文初特第三八〇号）が文部省からだされました。

当時としては、このような措置をしなければならない、それなりの理由がありました。しかし、目が見えないからこの子は盲学校というふうに、他の側面は全く無視して教育の場を最初からきめてかかることは、どう考えてみてもおかしなことです。

視力障害の程度だけで学校教育の場をきめてしまうことがいかに無理なものであるかは、現在、盲学校の小・中学部に在学している弱視児童・生徒のうちの約六〇％が〇・一以上の視力のものであるという実態調査の結果からでも明らかです。法的には、盲学校の対象とすべきではないが、視力以外の他の要因を考えると、盲学校で教育をしたほうがのぞましい子どもたちが大ぜいい

るのです。これとはちょうど逆の子どもたちもまた大ぜいいることはいうまでもありません。

このように現行の法的基準はもはや実情にそぐわないものになっています。しかし、それをいまここで急に改正するというわけにはいきません。普通学校が盲児を教育するにはそれなりの条件を整えなければならないからです。そのためには実際にやってみなければ具体的なことはいつまでたってもわかりません。したがって、法律がある以上、それは当然守らなければなりませんが、しかし障害児教育の基本的なあり方からいって、そこに改正すべき点があるならば、いわゆる〝先導的試行〟をおこなうことにより、じっくりとその実践的・実験的なデータを積み重ね、検討していく必要あります。

今回の五人の子どもたちの事例は、これまで小学校に入学を希望しても、多くの場合、前例がないという点で実現しなかった、ということからも大きな意義があります。

三、発達のニードに応じて

しかし、そうはいっても、目の見えない子どもがほんとうに普通学校でやっていけるのだろうか、どうやって普通児といっしょに行動し、学習していくのだろうか、と疑念をもたれる方も多いかと思います。

①登校や下校の際、あるいは学校の中でケガをするようなことはないのか。②トイレや給食などは自分できちんとできるのか。③黒板に先生が字を書いても、それが見えないじゃないか。④ひらがなや漢字などの普通文字の読み書きはどうするのか。⑤教師は点字を覚えなくてもいいのか。⑥足し算、引き算などの筆算はできるのか。⑦複雑な絵や図もさわってわかるのか。⑧写生の時間はどうするのか、色はどうやって教えるのか。⑨体育にはどのように参加させるのか。⑩休み時間、友だちからとり残されて、一人ぽつねんとしているようなことはないのか。⑪教科書や副教材はだれが工夫して作るのか。⑫学年が進むにつれて教科内容がむずかしくなるが、それでもみんなについていけるのか……等等、いろいろと疑問がわいてくることでしょう。

これらの点については、これまでの経験から、私どもは〝大丈夫、いくらでも工夫のしかたがある〟という自信をもっています。自信があるからこそ、五人の子どもたちが入学するにあたって、その交渉の過程で、関係者にいろいろと説明をしてきました。

いずれ詳しく述べますが、たとえば普通文字にしても、レーズライターと呼ばれる道具があり、能力があれば盲児はそれを使っ

写真2

右　入学式から帰ってきて幼稚園の先生に，レーズライターで手紙を書く全盲のA子ちゃん
—埼玉県与野市立H小学校—

左　レーズライターで書いた自分の名前。ボールペンで書いたあとがもりあがる　(1975・4・10)

ていくらでも読み書きができるのです。(写真2)

小学校の場合はやはり盲学校に入学させるよりは親にいろいろと負担がかかることは確かです。親や教師に負担がかかるから、あるいは盲学校のほうが専門の教師や盲児用の教具がそろっているから、盲児は盲学校で教育をしたほうがよいという意見もあるでしょうが、しかし前向きに考えるならば、アメリカのようにいずれは視覚障害児のための「教材・教具開発・供給・保管センター」を作り、盲学校のみならず普通学校に在学している盲児や弱視児にも必要な教材・教具が行き渡るようにしなければなりませんし、また盲教育の専門の教師や教材・教具がそろっている盲学校が、その地域における盲児の統合教育についてセンターとしての役割を果たすよう努力していかなければなりません。

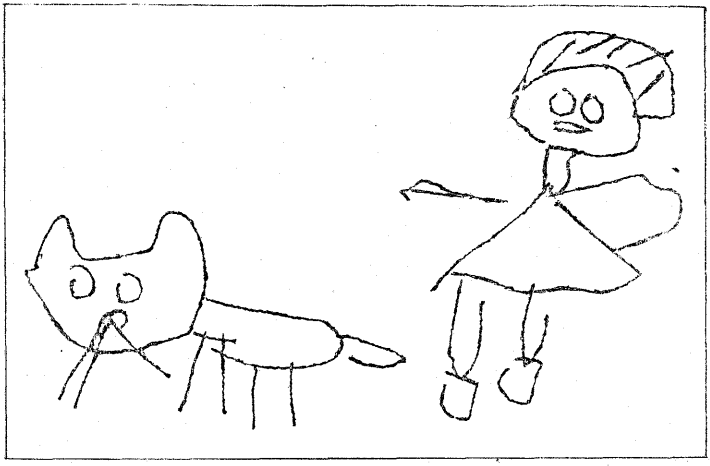
ここでいう統合教育とは、一人ひとりの盲児の発達のニードに応じ得る教育の場を設定し、必要にしてかつ適切な教育的措置が可能なように、それらの教育の場を組織化することです。普通児との共学はこういった統合教育の一環をなすのです。ある盲児には、より発達するうえに、普通児といっしょに生活し、学習する教育環境が必要であり、また一方では、視覚障害に加えて、知恵おくれなど他の障害があるために、盲学校においてより徹底した個別指導を受けることが発達的にのぞましい盲児もいるのです。

したがって、〝すべての盲児を普通学校〟、あるいは反対に、〝すべての盲児を盲学校に〟というのは、一人ひとりの発達のニードを無視した、言い換えれば個人差を無視したまことに乱暴な意見だといえましょう。

——つづく——

(国立特殊教育総合研究所)

追記・写真掲載については、両親および学校の了解ずみ。



〝ネコが逃げちゃったところ……〞
全盲のK子ちゃんは，レーズライターで絵を描くのが得意
—埼玉県小川町立O小学校—　(1975・4・8)

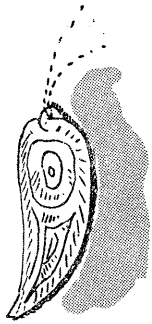
手作りの絵本

〝高校生と保育〞より

遊びをめぐる夢想（その三）

―「まれびと」の位置―

本田和子



子どもたちのところへ、時々やってきて遊んでくれる大人がいる。それは年上のいとこだったり、若い叔父さんだったり、さまざまであるが、子どもたちはその人の訪れを心待ちにしていることが多い。

「お兄さんは、今度はどんな遊びを教えてくれるだろうか」

「また、あの恐いお話をしてくれるかしら」

子どもたちの期待はふくらむ。

「今度あのお兄さんがきたら、一緒にトランプをしよう。それとも、かんけりをして遊ぼうか」

お兄さんが入るだけで、ありふれた遊びもぐっと楽しくなるから不思議だ。

幼稚園や保育所では、この役割を、実習生などがになっている場合が多い。「お姉ちゃま先生」の来園日は、子どもたちに心待ちにされ、その日は、思いっきり甘えられ、思いっきり遊んで貰える「特別な日」になるのである。「余りはしゃぎする」と、保育者の眉をひそめさせるほどに、「訪れる人は子どもたちを刺激し、喜ばせる存在なのだ。

子どもたちの生活は、安定した日常性の上に築かれている。両親、兄弟姉妹、その他少数の定まった人によって形成されている家庭、一人の先生を囲み、一定数の同じ幼児から成るクラス集団、登園すれば担任の先生の同じ笑顔が待っているし、家へ帰れば母親の変わらぬ声が子どもを迎える。こうした基盤の上で、彼らの毎日はくり返されるのである。

ところで、これらの日常的な平穏を破るのが、時々訪れる親戚のお兄さんや実習生のお姉さんの出現ではないだろうか。子どもたちの日常性の中に突然舞い込んできて、一ときの興奮と楽しさを巻き起こし、時には日常的なわくや秩序を破壊することさえしながら、あっさりと去って行ってしまう「旅人たち」これらの人々は、子どもたちにとってどのような存在なのだろうか。

◈　◈　◈　◈　◈　◈

日常性に安住し、社会的な慣習や秩序に準拠して生きる人人を、「生活者、定着者」と呼ぶとすれば、この侵入者たちを「漂泊者、放浪者」としてとらえることができる。幾分文学的に、「さすらい人」あるいは「まれびと」などと呼ぶことも許されようか。

古い時代に、私どもの先祖たちは、これら「まれびと」に多くのものを負うていたと言う。とりわけわが国の場合信仰の中心は、「まれびと」の神であった。また、演劇にしてもあるいは音楽にしても、これらの人々の漂泊の旅の中から生まれ、放浪と共にあちこちに広がっていったという歴史を持っている。

先祖伝来の土地に生まれ住んで、他郷を見ることなく一生を終える村人たちが、四季折々にこの「まれびと」の訪れを鶴首して待ったであろうことは想像に難くない。そして「まれびと」たちは、その非日常の香りのゆえに、「聖なる来訪者」であった。

ここでは、これら放浪者の歩みの跡をふり返ることによって、子どもらの上に訪れる「まれびと」の役割をとらえ直すことを試みようと思う。

◈　◈　◈　◈　◈　◈

放浪の芸能人の姿を、文献的に探ろうとするなら、「万葉集」の「ホカイビト」にその最初の面影を見いだすことができる。ホカイビト（乞食者）とは、祝言を述べることを職業とする者であったと言う。相手を祝福する意味の「祝く」の活用形、「ホカヒ」から名付けられた名称であろうと解される。

「万葉集」に採録されている「乞食者詠二首」とは、「鹿のために痛みを述べて作れる歌」と、「蟹のために痛みを述べて作れる歌」の二つであった。人間にとらえられた鹿あるいは蟹が、服従のことばを連ねて、「どうぞわが身をお食べく

ださい」と訴える物語歌である。「詠」とは身振りを伴なった歌の意であるから、ホカイビトたちは、これらの歌を歌いながら、鹿や蟹の動作をまねて舞い踊ったものと思われる。

ところで、捕われの動物をうたうことが、なぜ祝言となり得るのだろうか。三隅治雄氏によれば、この歌に登場する鹿や蟹は、田畑を荒す害敵であったため農民から憎まれていたが、一方では、それらは貴重な食肉でもあって、それらが捕獲されることは、二重の喜びであったろうと解されている。すなわち、鹿や蟹が捕えられ「お好きなようになさってください」と、その屍を差し出すことは、農民たちをこの上なく楽しませたのである。

――わが角は御笠の料
わが耳は御墨の坩
わが目らは真澄の鏡
わが爪は御弓の弭
わが毛らは御筆料
わが皮は御箱の皮に
わが肉は御鱠料
わが肝も御鱠料
わがみげは御塩の料
老いたる奴
わが身一つに
七重花咲く　八重花咲くと
白し賞さね　白し賞さね――

捕われの鹿は、全身あますところなく「あなた様のお役に立てましょう」と、頭を垂れているのである。

この歌と踊りの中に、フレイザーの言う、「模倣呪術」の思想を見ることは容易であろう。つまり、鹿を捕えたいと願うならば、その鹿の捕えられた姿を歌や身振りで演じ、「かくあれ」と祈念するのである。すると、ことは成就し、演じたとおりのことが現実に起こる。折口信夫氏が「感染わざ」と名付けたのがそれである。したがって、鹿や蟹の捕われの姿を演じることは、それらの動物の捕獲につながるものであった。

沖縄のある地方には、弓矢を手にした巫女が猪や魚にふんした者を追いかけ、それを射倒すという神事が、現代までも伝わっていると言う。恐らくは、古代のホカイビトたちもこうした信仰を背景にして、これらの歌を歌い、かつ舞って、訪れた村々の繁栄を予祝して歩いたのであろう。

彼らの多くは、海辺に住んで魚具を捕ることを生業として

いた「海人」の末裔であったとされる。水田耕作が普及し、農民が定着して農耕共同体が社会の中心を占めるようになると、これら土地を持たない非農耕民と定着農民の間には、自ら一線が画されざるを得なかったのであろう。結果として、彼らのある者はホカイビトの道を選ぶに至った。「古事記」に見られる天語歌も、伊勢の海部によって伝承された「海語り」であった。

ホカイビトが活躍するのは、村々の祭の宴であった。それゆえに、「ハレの日」に訪れて村々をことほぐ彼らは、村人の側から見れば、神秘的な呪力によって恩恵をもたらす神の化身であったろう。事実、ホカイビトの同類の「山人」は、「古今集」などに歌われているように、神のよりしろである山の蔓草を身につけ神霊のやどる榊の枝を手にして、祭の庭に現われるのが常であった。山人自身も、己れを神に擬すことで祭のよそおいを整えたのであった。

◈　◈　◈　◈　◈　◈

能の「翁」は、能の持つ祭儀性の象徴であると言われている。本来は、祭の庭が舞台であり、神聖な祭事であった能も、現在は、舞台芸術として発達し、祭儀的な神聖性は芸術性へと転化している。しかし、「翁」だけは、まだ、神聖な儀式の性格を残しているのだ。

「翁」が上演される際、演者たちは、火のけがれを忌避し、身を清浄に保つために、一定の期間、「別火」の生活を守ると言う。人々にとっても、「翁」は「見る」ものではなく、「拝見する」ものであった。なぜなら、「翁」は神であったからである。演者は、老翁に扮して定められた舞いを舞うのではなく、白色尉の面をつけることによって「聖なるもの」へと変身するのである。舞台上の「翁」の舞い姿は、訪れ来たった神の姿であった。

現在では、「翁」が演じられるのは神前能か正月だけである。世阿弥の晩年には、既に神事以外に上演されることは、殆んど無かったとされている。

観阿弥、世阿弥の時代に、能は足利将軍の保護を受け、猿楽師（能役者）たちもまた将軍の寵を得ていたが、一方では、「猿楽は、乞食の所行」として、さげすみの眼で見られることも少なくなかった。変身によって「まれびと」の神を顕わす猿楽師たちは、ホカイビトの末裔として漂泊の賤民で

もあったわけである。

戸井田道三氏は、能を「神と乞食の芸術」として把握する。さげすまれ、いやしめられる身分の者であったからこそ、「聖なるもの」に変身し得る社会的約束が成立していたのだし、同時に、聖なるものに変身し得るその代償として物を貰うがゆえに、人々のさげすみを買ったと言うことができようか。「翁」が演じられるとき、舞台に現われたシテは、最初、客席に向かって平伏する。しかし、白色尉の面をつけて神に変身するや否や、観客は「拝見する」立場に逆転するのである。神と乞食のこの二重性に、能の特色を、ひいては、わが国の芸能一般の特色を、あらわに見ることもできるかもしれない。

いずれにしろ、これらの人々は、日常的な秩序に依拠する定住の民ではなく、非日常的な特殊人であった。自身の手で鍬を握って耕すこともせず、鎌を持って刈ることもしない。それでいて、食物を手に入れ、生計を維持し得る不思議な者たち、特殊視され、いやしめられるのも無理からぬことであった。そして、そのゆえにまた、畏怖の対象ともなり得たのである。

◈　◈　◈　◈　◈　◈

「まれびと」の歴史は、その後、「河原もの」とよばれる一群の芸能者集団を発生させている。歌舞伎役者たちは、その代表と言えるかもしれない。しかし、それ以上に、村々をめぐった説教師や祭文語り、歩き巫女、あるいは万才師などのありようにこそ、万葉以来のホカイビトの姿を見ることができるのではないか。彼らは四季折々の村の祭に姿を現わし、常民の生活と分かち難く結びつきながら、それでいて決して融け込むことのない宿命の道を、一所不住の悲しみを負いつつ歩き続けてきたのだ。

これらのさすらい人たちは、「門付け」ともよばれた。彼らが、門口に立って家々を祝福し、芸を演じたからである。

門口は、内と外とをつなぐ点であり、同時に二つの世界を分かつ境でもある。門口にたたずむ門付けたちは、境界に立って二つの世界を結ぶ者としても機能したのであった。信仰的には、神を顕現して家々を祝福し、時間を浄めた。それと共に、彼らは、知らずしてその身にまとった他郷の香りのゆえに、みずから文化の伝播者でもあったのである。物語や歌謡など、口承文芸の伝承に関しては、これら漂泊の民の存在

を抜きにして語ることはできない。

ところで、明治以降社会の近代化が進むにつれて、これら旅の芸能者の歩みは、徐々に困難なものとなってきている。わが国の場合、明治政府による国家神道の制定に伴なう民間宗教者の追放や、芸能人鑑札制度の強化が重要な要因であるとされている。同時に、劇場の常設やマス・コミの発達に伴なって、常民の側にも、これら旅芸人の訪れを不要とする心的体制が、作り上げられていったのであろう。そしてまた、近代の合理的知性が、時のめぐり毎に神の来訪と祝福を必要とする素朴な信仰から、人々を遠いものとしていったことも確かである。

訪れる「まれびと」と触れ合える心は、サンタクロースを心待ちにし、あるいは「なまはげ」の襲来におびえる子どもらの中にのみ、僅かに残されているのかもしれない。

放浪は、一ヵ所に安らぐことを拒む魂の、模索と創造の旅である。漂泊者たちは、常に新しい土地を訪れ、新しい人々と出会うことによってしか生きることができず、その出会いを通じて己れの肉体と芸を養なっていった。定住者たちもまた、彼らとの出会いを通じて、固定化し殻に入りかけた自身の魂を目覚めさせ、新しさをとりもどしていたのではなかったか。

さすらい人の呪術や芸能は、旅の道すがらの様々なものとの出会いによって、時々刻々、変わっていく性質のものである。したがって、彼らが、次の村で何を語りいかに歌うかは、予測のつき難いことであった。体制の管理者、現行秩序の維持者から見るなら、これほど厄介で危険な存在もないであろう。統一国家の形成に伴なって、旅芸人の運命が没落の一途をたどったのは、けだし当然であった。

しかし、さすらいの信仰と芸能が消滅し、逆に、電波によって画一的な情報や娯楽媒体が全国に流されるという現代において、私どもは、果して自分たちの力で自由に自分たちの文化を更新していくことができるのだろうか。ここ数年来、活発化してきたテント劇場などの運動は、この情況への告発であり、一つの決意の表明とみることができよう。

◈　◈　◈　◈　◈　◈

さて、このあたりで、身近な子どもたちの上に視線をもどそう。子どもたちは、日常的な秩序という壁に囲まれ、保護

された安全の中で、その毎日を展開させている。児童文学者の多くが、幼年期の象徴として「囲われた庭園」を形象化しているように、彼らの成長にとって、一定の生活のわくと規則的なリズムのくり返しが、不可欠の要素であることは事実であろう。しかし、子どもたちが、壁の向こうを見たい、外の空気を呼吸したいという激しい渇望に全身を焦がすこともまた、確かである。安定と均衡が大切ならば、同時に、均衡が破れる混沌の瞬間も重要ではないか。人は誰しも、成長の過程で一度は家出を試み、遠い国への旅立ちを夢みるものではないだろうか。

そして、この旅立ちを促すのが、「まれびと」の訪れなのである。物語の世界から、この例をあげるとすれば、恐らくは枚挙にいとまがないであろう。魔法使いガンダルフの突然の出現によって、思いがけない冒険の旅に出てしまったホビットを先頭に、しまりすのグリックやねずみのガンバ、あるいはよりリアリスティックに、大道の手品師についていってしまった善太など、彼らの列は長く長く続くことであろう。

いま、眼の前にいる子どもたちにとって、親戚のお兄さんや大学のお姉さんたちが歓迎されるのも、これらの人々が、日常性をつきくずすもの、外の世界の息吹きを伝える「まれびと」のゆえではないか。

たまにしかやってこない彼らは、日常の細々とした振舞い方やきまりに精通してはいない、そのゆえに、秩序を維持しようとする側から見れば、侵入者であり破壊者である。時として、それは、「厄介で、困った存在」と見えるのも、無理からぬことである。しかし、そのゆえにまた、彼らは子どもたちにとって魅力的な存在であり、必要でもあるのだ。「まれびと」の訪れは、子どもたちの遊びをよみがえらせ、一入の輝きを帯びさせるのであるから。

（お茶の水女子大学）

うたのこころ

浅野千鶴子

〝うたのこころ〟というテーマで何か書くようにとの編集部からのお便りで筆を取りました。詩人北原白秋は〝森羅万象、生きとし生けるものの生命を尊び、あわれみ、それに頭を下げる、これが詩の心であり、聖心、神へ通じる心であるとの味わい深い言葉を残しております。この詩心こそあらゆる芸術の心となり、魂となるものだと思います。そしてこのうた心こそ芸術家のみでなく、すべての人の心にはぐくまれてほしいものだとしみじみ思うのです。聖アウグスチヌスは〝歌うは愛する業なり〟といっています。詩を読み、歌をうたうのはみなこの愛の業だということでしょう。本当に味わうべき言葉と思います。詩人が心をこめてうたい上げた詩をうたうものも愛をこめて歌うのは当然のことなのですが、このごろの若い人たちのうたに、どうもこのうたの心が足りないことを残念に思っています。声量は立派でも、聞く者の心に何もふれるもののないのはさびしいことです。昨年六月イタリアのブセートという所で行われました国際声楽コンクールに参加しました時も、世界各国から応募した百人近い人の中で、九名の日本人が歌ったのですが、声をはり上げるだけで、心にうったえるものがありませんでした。何が不足なのでしょうか。それはあらゆるものに対する暖かい愛がないことだと思います。幼い子どもの心にまず暖かい愛のいぶきをささやくのは母のやさしいまなざしと、子守歌でしょう。それから子どもたちの成長と共に、あらゆるものに対する愛と詩心を教えるのは、大自然のふところだと思うのです。私たちの幼い日の思い出といえば、ほとんど自然の中にいる自分の姿です。れんげ草や菜の花畑、校庭のさくら、ほたる追いの夜、川辺の夕暮をほの白く咲いていた月見草等。私が

小学校五年生の時、一年上級の女の子（名前はもう忘れました）が

聖堂の鐘のひびきに花ゆれて
春日のどかにたそがれてゆく

という和歌をよんだことを今もおぼえています。私も小学校二、三年のころ〃お茶わんの音にめさます子猫かな〃などという駄句をよんだりしていました。とにかく昔はもっと自然が私たちを包んでいてくれましたから、自然に詩も生まれ、句もうかんできたのでしょう。今の子どもたちは自然の美しさ、恵みなどから遠くはなれて行くようで本当にかあいそうな気がいたします。

人間の本当の幸福はその人の心の中に宿る愛の密度ではないでしょうか。そしてそれは幼いころの心にやどった自然への愛、つまり詩の心が一番大切な種子のように思えるのです、何とかして日本のよき将来のためにも、私たち大人の責任として、大切な子どもたち一人一人の心を自然への愛に向け、そこから詩の心へ、またあらゆるものへの暖かい思いやりから、真に深い人類愛へと育てて行かなければとしみじみ思うこのごろです。子どもたちを直接ご指導なさる先生方、そしてお母さま方に私は心からおねがいしたいのは、どうか子どもたちと一緒に可愛い子どものうたをお歌いくださることです。最近ピアノはわれもわれもとまるで競争のようにひかせていられるようですけれど、昔の小学校唱歌の様な格調の高い子どものうたはあまり歌われていない様です。そして現在の教育は子どもたちにあまりにも、勉強勉強、試験試験と強いることが多く、大切なことが忘れられていると思います。子どもの夢はうばわれ、実に子どもらしさのない子どもたちになってしまうような気がして、心いたむ思いです。そもそも子どもは生まれながらに絵を書き、うたを歌うという天性をさずかっていて、自分たちの周囲にある生命あるものまた生命なきものまで、あらゆるものに興味と親しみを持って近づこうとしています。そうして子どもほどこの宇宙の神秘や美しさに、驚ろきとよろこびを感じることが強いと思うのです。

空も、雲も、花も木々も、小鳥たちも、犬も猫も、カエルも、めだかも、小さい虫も、石ころさえも、子どもたちに取っては親しい友だちなのです。

愛とはその対象を尊び、大切にすることです。子どもたちの心こそどんな小さいものも大切にし、自分の友としようとしています。この美しい幼い心を大切に育てて行くの

が、私たち大人のただ一つの尊い仕事とつくづく考える次第です。

もう一度白秋の言葉を思い出して見ましょう。詩の心とは森羅万象、生きとし生けるものの生命をあわれみ、尊び愛すること、そしてそれは神に通じる心〃とありますが、この神に通じる心こそ、うたの心であり、それはまた生きとし生きるものへの神の愛を知ったものの、静かな祈りではないでしょうか。私たちは何とかして幼い子どもたちの心にこの神の愛を感じさせたいと心から願うものです。

神様はのきの小雀まで
おやさしくいつも守り給う
小さいものをもお恵みある
神様わたしを愛し給う
野辺の花、小鳥、よろずのもの
お作りになりて愛し給う
小さいものをおめぐみある
神様わたしを愛し給う

子どものころよく歌っていたうたです。こんなうたをお母様がご一緒に歌ってくだったら、子どもたちはどんなに幸福でしょう。

（声楽家）

七月のうた

今、〃七月のうた〃というと、多分皆さんは〃ささのはさらさら　軒ばにゆれる〃という〃七夕さま〃の歌を思い浮かべる方が多いのではないでしょうか。毎回どうも古いことばかり申し上げておはずかしいのですが、私が思い出すのは、〃水鉄砲〃なのです。水をくんできて、水鉄砲で、シュッシュッと水をかけあう。歌いながら、遊戯をしながら、本当に水がからだにかかるような気持ちになったものです。およそ単純なメロディー、リズムですが、それだけにすぐ覚えたのかもしません。そしてこれを歌うたびに、もうなくなられた幼稚園時代の恩師、新庄よし子先生の、お元気な大きなお声、着物にはかまというお姿で子どもたちと一緒にお遊戯をなさっていたお姿が、ハッキリと目の前に浮かぶのです。そして当時、私が家へ帰ってして見せた遊戯を、私の母はちゃんと覚えていて、今、自分のひ孫に教えているのです。

（赤間　峰子）

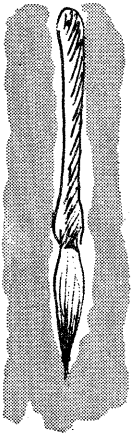
幼稚園真諦　復刊の序

倉橋惣三選集第一巻より

わたしは、この書の初版の序に、こう書いている。

『真諦とは、われなら、おこがまし過ぎる僭称である。識者の笑いを買うをおそれる。実は、保育法に関する一つの考え方というべきであろう。ただその考え方が、自分としては、これ以上動かないのである。身を幼稚園に置くこと久しい。疑惑と攻究と、またいつも付きまとう遅躊とを経て、やっとここに落ちついた考え方である。自分だけでは、少なくも今のところ、これを真諦と信じている。

フレーベルの精神を忘れて、その方法の末のみを伝統化した幼稚園を疑う。定型と機械化とによった。幼児のいきいきしさを奪う幼稚園を慨く。幼児を無理に自分の方へ捕えて、幼児方へ赴き即こうとするこまやかさのない幼稚園を忌む。つまりは、幼児を教育すると称して、幼児を先ず生活させることをしない幼稚園に反対する。――しかもこれ皆、他に対していう言葉ではない。そこで私は思い切って従来の幼稚園型を破ってみた。古い殻を破ったら、その中からみつけられたものが、この真諦である。



この小さい本は、幼稚園保育の全体美を取り扱っているものではない。……幼稚園というものを、その真の面目において生かすべき実際的な契を捕えたいとしている。この意味において、保育法の平な概説ではなく、寧ろつきつめた主張の書である。先ず丹念に、私の言おうとしているところを汲みとって頂きたい。理論的の組み立てや、基礎づけではなくして、どこまでも実際を実際に即して、諸君と共にみつめたいと希っているのであるから。』

初版後年を経ること約三十年、久しい絶版の後、ここに復刊を試みるのは、わたしの考えが、尚この枠の中を往来しているからである。尚また、その実現を見ることの少ないのを慨くからである。微衷を記して、復刊の序とする。

昭和二十八年三月　　著　者

幼稚園真諦をめぐって

八坂富子

このごろの保育の中で

倉橋惣三選集第一巻の初版が出てから十年の月日が流れました。その間私が在職しました広島大学の付属幼稚園に、福岡の中村大学の研究室に、あさひ幼稚園に、そしてまた東京の若葉保育園、東福保育園、草花幼稚園の書棚に四巻までの四冊がおさめられています。

そして私の保育の実践が幼稚園真諦に支えられていることはもちろんのこと、共に保育に携った大勢の若い先生方やお母さんたちを通して、またこれから現場へ巣立っていく学生を通して一生懸命保育の心を伝えて来ました。時には手足や体を動かして拙い実践も試みました。一言でいうならば子どもの生活を大切にするということでしょうか。生活で生活を生活へ、ことばの通りです。先生のよく言われる「園丁」の役を果たすべく、このごろは草花丘陵の一角で梅のほころびはじめた園庭を、右往左往するのが日課の一つになりました。

幼稚園真諦の歴史的考察

私と幼稚園真諦との出会いは、朝海幼稚園で新卒三年目を迎えた夏の講習会場で求めた「幼稚園保育法真諦」の初版です。先生の著書は単行本でその都度求めましたので、幼稚園真諦も昭和九年の初版に長年親しんで来ました。これには第四編に誘導保育案の試みとして、当時付属幼稚園で行った実践例が五題百十ページのスペースをとって報告されています。当時は、教員の養成が講義と実習と並行して行われていましたので、本校で講義をきいて帰ると付属で誘導保育が展開されていて、配属学級の作業や遊びに参加したり実習したりという具合で、この第四編には殊更愛着を感じるものです。実践例の序文に次のように記されています。

「教育は考えてばかりいては解けぬところがある。いわんや論じ合ってばかりいては益々むづかしくなるばかりである。試みて見るに限る。そこには案外に多くの可能も見出される。おのづからなる会得にも到るというものである。試みるには少しばかりの勇気がいる。しかしそれが故にこそ真の楽しさも亦伴うというものである」戦後カリキュラム論がはなやかであったころ単元という言葉が耳新しかったり、また現行の教育要領の中で望ましい経験や活動を選択配列し、とか生活経験に即し総合的な指導を行

う、などの考え方が既に四十年前の誘導保育案の中に流れていたと思うのです。

更にさかのぼると、その前年昭和八年の夏、日本幼稚園協会主催の夏期講習で六日十二時間連続で「幼稚園保育の真諦並びに保育案、保育過程の実際」と題して倉橋先生の講義を受けました。この講義の内容が翌年「幼稚園保育法真諦」として出版されたということが序文に記されています。この時に質疑応答の時間が充分に持たれて現場の多くの先生方から切実な問題が提起されました。その速記録が講義の内容も含めて幼児の教育三十三巻八、九号に記されています。この原稿を書くに当たって何年振りかで読みかえし、いつの時代も変わらぬ現場の悩みと、それに対する明快な解答に感激を新たにしました。

更にさかのぼると昭和六年から七年にかけて、お茶の水のバラック校舎で学んだ先生の保育の講義です。保育法真諦はその序文にも、

「この本は幼稚園保育の全体系を扱っているものではない。その方法に関してだけ語っているに止まり……」と書いておられる通り、あの底には先生独自の保育原理や原則が流れていると思うのです。それが当時のノートをくって見ると出て来ます。

保育法の原理　一、自発の原理　二、具体の原理　三、活動の原理　四、社会的原理

その原理に基づいた原則が

保育法の原則　一、間接教育の原則　二、相互教育の原則　三、機会教育の原則　四、充足の原則　五、生活誘発の原則。

ここから発想したものが幼稚園真諦であり、誘導保育案であると考えるのです。

（草花幼稚園）

江波諄子

倉橋惣三先生の解くところを語るのは、私にとって時期尚早なことです。少し前から、選集の編者で、わが短大の学長でもいらっしゃる坂元彦太郎先生より、直接に細かい微妙な解説をきき始めて、只今はますますこの本は、長く時間をかけて、自己の成長とともに熟読するに値すると感じ始めております。また十年前に、津守真先生がつくられた倉橋惣三の誘導保育論という小冊も、まだ手離さず日々読み味わっておる次第です。不運なことに、直接倉橋先生を存じ上げませんが、当時、倉橋先生と深くかかわり、倉橋先生を十分理解されていらっしゃる諸先生方を通してこの選集を伝えられるということは、幸いなことだとも思っております。いわば、私は孫の代ともなるのでしょうか。私の焦りは、私の次の世代にいかに倉橋惣三論を伝えることができるかに

あるとも思っております。

倉橋惣三選集を、この十年パラパラとページをめくり、幼稚園真諦を読み始めて感じ始めたいくつかのことがあります。その中で、一番大きく感ずることは、このように保育というものを生き生きと、ダイナミックに、難かしいことをも例えて柔らかく論じた本は、数が少ないのではないかということです。もちろんこれが講演をもととしていることもそうなる原因のひとつでしょう。しかし、とかく学問を通して幼児の保育を考え始めると、どうしても頭の中に入って十分に消化しきれないいくつかの理論にとらわれがちになりますし、また、体験の中から幼児をとらえると、細かい保育技術は実にすばらしいのだけれど、統合的にまとめて他に語るまでには力が及ばないのがふつうだと思うのです。これら二つの悩みを結びつけ、十分に納得のゆくように語っているのが幼稚園真諦であると思います。

この中には、倉橋先生と、当時現場を担当しておられたお茶の水女子大学付属幼稚園の先生方との火花を散らす焦点が書かれてあると、坂元彦太郎先生がいわれました。まことに、そこには子どものみならず、若き現場の先生方の生々しい姿と、それを十分に受けとめ、感じ入る目があってこそ生まれたのだろうと察することができるのです。ひとりの小さな人間が、ただひたすらに力強い生命のエネルギーをもとに育つ姿と、それをみまもる大人の賢く慈愛深い育てる心が深く感ぜられます。幼児の保育に限らず、人間が育つ、または育てられる過程では、こうした真剣な両者の交錯はいつでも行われるものなのだと確信するのです。

幼稚園真諦の中では、いくつかの特別の語彙が意味深いものとして私共の注意を引きますが、私は倉橋先生が―自由遊びから仕事へ―の中で述べていらっしゃる自由感と精進感という語に目を止めさせられました。その他、自己充実、誘導など注意深い理解を必要とする魅力的な言葉がたくさん現われてきます。これらはいずれも私にとって、保育のみならず、奥深い人生観としてとらえられるのです。

幼稚園という場も、誕生して以来百年もたちますと、次第にその名のみにとらわれ、形ばかりあまりに大きくなりすぎ、子どもを育てる本質がとらえにくくなります。私自身は現代の社会全体をも含めて、あまりにも慣習化し、加速している技工的生活から一歩でも抜け出られる余裕を持ちたいと願っております。この中で、幼稚園という場を、もう一度できた当初の精神にもどし、また幼い子どもの成長してゆく生活の本質をみつめ直す意味でも、この幼稚園真諦を読んでみることの意味深さをひしひしと感じております。

（十文字学園短大）

高校生と保育
―授業の中より―

三好美那

表情人形

核家族化の進んでいる中で、最近はどこの家庭にも子どもの数が少なくて、きょうだいにも、隣り近所にも恵まれず、幼児に近づこうと思っても容易ではないというのが現状である。

私の受持っている二つのクラスにおいても、家族中に乳幼児がいる者は僅かに三～四人であって、子どもに関する知識は極めて薄く、相当数の者が乳幼児の具体的な事象を忘れてしまっているという状態が普通である。したがって保育園なり幼稚園と連係をもたないと、教科書だけでは全くどうにもならない現状であることを痛感する。それだけに保育の授業への関心度は決して少なくなく、他の科目と同じ程度に熱心な学習意欲や態度が見られて、うれしい限りなのである。二年ほど前に県内の西部地区の高校生を対象とした研究でも将来の自分の生活設計について思考もし、級友とも討論し、レポートにも表現して、なかなか現実的にもはっきりしたライフサイクルを持っていることに私共教師は驚かされた経験をもっている。このような生徒たちの要求に応じて保育の授業をいかに展開していったらよいのか。いろいろ指導案に工夫をこらした結果、教科書の順序を思い切り崩して〝子どもってどんなものでしょう〟と、保育園へまず見学に行って子どもの姿を把握させた。生徒たちは、各種各様の観察をしていて、その発表は生き生きとしていて、その中にこんな発見の数々が見られ

た。

- 子どもって非常に元気でじっとしていない
- 子どもって独占欲がつよい
- 子どもってエゴイストである
- 子どもってすごくかわいい
- 子どもって体全部を使ってあそぶ遊びが好きなようだ
- 子どもって何にでも真剣になるものである
- 子どもって仲間に入りたいのを押えてまわりで邪魔をしているものがいる
- あんな小さな子どもにも、もうヒロイズムの芽が出ていて驚いた

これらを見て、教師側から子どもの特徴を羅列的に講義するより印象深く確認されたことに、効果があったんだなと深く思った。

生徒たちは次回の訪園を待ち望んでいた。

第二回は、身心の発達を知るためには、生活のすべてである〝あそび〟を通じて学ぶことであると解釈して、幼児のあそびについて学習を重ね、市販の玩具の見学も終わり、子どもの成長に役立つ、あるいはよろこばれるであろう玩具を、グループ研究して製作し、子どもの反応を調べて見た。作品例として、

(1) **積木パズル**……初めはおそるおそるであったがパズルの完成に得意になって独占して困ったとか。園長先生に「これはいいおもちゃだ」とほめられ生徒も満足のようすであった。

(2) **トンネルあそび**……大きなダンボールをつなぎ合せて幼児の好みそうな絵を側面にべったり書き並べたもので、なかなかの人気で満員であった。中にはすわっていて窓から首を出して出てこない子どもがあったりして、交通整理に大わらわというところであった。

(3) **縫いぐるみの大蛇**……全長三メートル、直径一五センチの蛇二匹。どのような反響かと胸をおどらせつつ子どもの前に見せたところ。大歓声と共に集まってきて……体にまきつける、つな引き、プロレスごっこ「四の字がためかと」縄とび、電車ごっこ、かついでワッセワッセと走り回って追いかけっこ。あそびがつぎつぎ発展して、生徒たちも満足のようすが見えた。

(4) **いじわる輪投げ**……台をゆらせて動いている缶を目指しての輪投げであるが、動きがおもしろいのか、楽しんでいる風景が見られた。

(5) **表情人形を使ってのお話**……ビンクのもぐらさん、でぶもぐらさん、チェックのかえるさんからなるトリオ。スポンジとタオルを使って安全性と感触のよさを考えて、手を入れて表情を作り

ながらお話を聞かせる。夢中になって見入っている子どものかお、かおがあった。園の保母さんも感心して見ていた。

保育園を立去るに当たって子どもたちが垣根によじのぼって手をふりつつ「おねえーさあーん、またきてねえ――」の大声が、相当離れるまで聞えてきて、生徒たちは感激して、それぞれの子どもたちの反響を話しながら帰校した。話に夢中になって電柱に衝突してコブを作った生徒もあった。

次回は、絵本についての学習のまとめとして、手作りの絵本を作って、どんな絵本を子どもたちは喜ぶだろうか、どんな与え方(よみ方)をしてあげるのがよいか等を研究した。作品中より評判のよかったベスト10をあげると、　(13ページ写真)

(1) **くまさんのおとしもの**……二人の子どもが、くまさんの落としためがねを遠い道をいろいろの動物に尋ねながら届けに行って喜ばれたというのであるが、絵巻物ふうになっていて、一枚の長い長い紙を使ったのが予想外に子どもに受けて、廊下にねころんで何回でもくり返して見てくれた。

(2) **白い馬にのって**……お菓子好きのよっちゃんは、白い馬にのっておかしの国へ行ってお菓子に苦しめられた夢を見て、ごはんをたべるいい子になったというお話。

(3) **ミミちゃんの一日**……落し穴に落ちたミミがうさぎに助けられ、仲よしになったが、うさぎの家のごち走は人参ばかりなので食べないミミがうさぎを悲しませ、人参をこんどまでに好きになる約束をするというお話。

(4) **あかべえのぼうけん**……迷子になったクレヨンがいろいろの冒険をし、苦労して戻ってくるお話。

(5) **淋しいようせい**……長い間孤独であった妖精ミニー(大きな木)がやがて船となった木と共に世界を巡って人々に触れ、船はこわされるが小さな窓となり、そこでミニーは暖かな仕合せを見つけることができた。

(6) **うさこのハンカチ**……うさぎのうさこは、なくしたハンカチに名前をかいてあったため、手許に戻ってきたというお話。読み終わった時、一人の子どもは自分のハンカチをとり出して見ていた。

(7) **あいうえおよっちゃんのおつかい**……文字を覚えさせるため、絵と文字と対照に描いたもの。

(8) **どうぶつうたのえほん**……動物の歌ばかり八曲をイラスト入りでかいたもの。

(9) **かくれんぼ**……すずめ、あひる、ねこのかくれんぼ風景を歌う。

(10) **カブのいちにち**……幼稚園ぎらいのねずみのカブが、ずる休

みをしたため、ねこにさらわれてこわい目にあう。危い所を助けられ、これからは幼稚園を休まない約束をするという話。

(11) **布の絵本**……紙に比べて布の方が手ざわりがよく、立体的なので、喜んで絵本に親しんでくれるのではないかという発想で作られたものであるが、布をえらび、刺繍を入れたり、スパンコールを使ったりして配色に留意した。子どもたちは何度もくり返しを要求し、離れなくて困った。園長さんも保母さんも、高校生では素晴らしいととてもほくてくださって、二人の生徒はうれしそうであった。

絵本、おもちゃの製作と、それを用いた保育実習の反省として生徒のアンケートを集約すると、

1 授業が楽しみで精いっぱいとりくめた。
2 手作りへの自信がついた。
3 高い費用をかけなくてもよいものができることを知った。
4 市販品を見る時の判断力が高められた。
5 創作の大切さを知った。
6 子どもの身心の発達が新鮮で明確に把握できた。
7 同一のおもちゃを使っていろいろな遊び方があることを発見した。

教師側にとってみれば、

教師と生徒と親密さが増し、ふだん消極的で元気のない生徒が、実に生き生きした表情で活動していることにびっくりした。また他教科（国語、芸術科目）での学習も総合的に応用されて、知的な好奇心が満足されているようすがよく見えて、効果があったと思う。

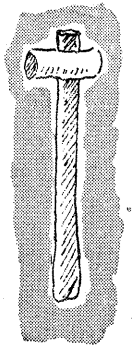
今後に必要なことは、健康な子どもの理解はこの程度に留め、身心障害児の施設における乳幼児はどのようであるかも、近く訪問して見せたいと思っている。婦人雑誌、週刊誌からのかたよった知識が先行している時代なので、高校時代から準備しておくこと、関心を持ってもらいたいことを整理して、母体の生理、誕生、保育技術についても、望ましいあり方、正しい知識を、限られた時間を最も有効に配分して学習をすすめ、幼児期の人間形成の重要性を十分理解させたいと願うと共に「育てる」という意味の社会における重要な意義を、保育を通じてすべてに発展させて行くこと、すなわち、花を育てる、心を育てる、友情を育てる、グループを育てる、会社を育てる、等、真に理解してもらいたいと願っている。

（静岡県立磐田南高等学校）

◇講演◇

革新するアメリカの保育

児玉省



アメリカでは現在、乳幼児期から始めて児童期までにわたって、大規模な保育を含む教育実験が行われております。評論家や歴史家の中には、これを革命的（revolutionary）と呼んでいる人もあります。その規模、構想及び方法において正に革新的であります。それが日本では案外に紹介せられておりません。私は昨年、ロンドンとカナダの学会に出席したあと約一ヵ月間アメリカ政府の案内で、アメリカ各地を回って見てくることができました。本日はこの問題を取り上げてお話ししたいと思います。

I、世紀的教育宣言

一九六五年八月三十一日、ジョンソン大統領が次のような声明を発表しました。それは、〝いかなるアメリカの子どもでも、生まれた家柄のゆえに破滅の運命を負わせてはならない〟というものです。貧しい家庭とか文化度の低い家庭に生まれたがために、場合によっては一生が台なしになってしまう、そういう運命にあわせてはいけないというのです。

これは、ホワイトハウスのローズガーデンに専門家を集めてなされた演説の中のことばですが、まことに注目すべきことばです。ご承知の通り、世界各国において、貧困のゆえに、低階層のゆえに、低文化層のゆえに、子どもが発達的な遅れを示していることが明らかです。それに対してメスを入れることを宣言したのであって、世紀の歴史的宣言というべきです。

II、ヘッド・スタート、スタートす

その後、この声明をもとに有名な Head-Start が出発しました。Head というのは、馬の鼻面のことで、競馬では、馬が出発する時には鼻面をそろえて一せいに出発しなければならない、それを Head Start というのです。そういう意味で、恵まれない子ども

もそうでない子どももそうでない子どもと同じように鼻づらをそろえて出発させようというのです。

Head Start は次の二つの哲学に則っています。第一は〝子どもは、自分自身の発達を促進し、自分の問題を解決するための、総合的な計画と施策から利益を得ることができる〟第二は〝子どもの家庭と同時に、彼の住んでいる地域社会は共にこの計画に参与しなければならない〟ということである。

この哲学に則った Head Start は、多次元的な方法によって行われるようになりました。たとえば、非常に多種多様な材料と経験、また準備された場面を利用して子どもの身体と感情性格の発達を促進しようとするものです。だから学科的に算数も化学も国語も社会科も、あるいはまた日曜日祭日のお祝いも、戸外、室内における遊戯も遠足も使う、さらにその子どもによる「性格的自己の発見」さえも使う、そういう総合的な手段、多次元的な方法を用いようとするものでした。

教師は、子どもに対して、子どもから「教師に要求する」ように刺激し指導し、また子どもの要求を許す教師の存在は、子どもに感情的な暖かい愛情を与えるだけでなくて、「子どもをより大きい世界へ誘導するためにあるのだ」ということを子どもに知らせようとしました。

では、実際にはどのように行われたのでしょうか。三歳から五歳までの全国の恵まれない家庭の子どもをとり上げましたが、子どもの発達の遅れが、子どもの住んでいる家庭の文化度が低い、経済状態が悪い、ということによるものであれば、それから手をつけなければいけないというのがその考えと手段でした。すなわち、まず家庭の経済的改善を考えなければいけない、たて直しを図らなければいけないと考えたのです。

だいたい、そういう家庭の親は普通のように働いていないことが多い。働いていても、出たらめな生活をしている親が多い。家庭をのぞいてみると、水道がない、その床下に水が流れている、ねずみがいっぱいいて子どもの遊び友だちである、そんな状態なのです。こういう家庭の親に、経済力をつけるということはすぐにできることではありません。その子どもたちを教育するには、どうしたらいいかというのは大変なことでした。

まず考えられたことは、家庭の経済に支柱を与えなければいけない、そうしなければ子どもの教育などできるはずがないということでした。そこで、とにかく子どもを施設で保育することにしました。そこではもちろん食べ物を与え、場合によっては衣服も与えます。そして、親の改善がなくては子どもの改善はありえないという考えから、週一回以上親も一緒に来てもらうことにしま

した。先生のもとで親子がそろって学び、生活します。しばらくすると、親は先生の手つだい役（teacher aid）になってきます。そこで、子どもの取り扱い方、しつけ方を学んだものを家庭でやらせようというわけです。働いている親は、一週間に一度以上来ることにしてあり、なかにはその施設で仕事を与えられている者もあります。たとえば料理の仕事をする、あるいは雑役をする、あるいは助手をするといった具合で、それによって親の経済力の援助をしながら子どもの世話の仕方を学ばせました。

実際に行って見たのですが、あるところでは小さな部屋に机があって、囲りに五、六人の子ども、教師（これは専門家）、それにボランティア（大学生から、家庭の主婦、高校生もいました）、そしてさきほどの teacher aid（家庭の母親が助手をしている）がいるのです。そこで何をしているかというと、幼稚園か保育所のようなことをしているのですが、大人も子どもも一緒になって遊んでいます。しかし大人の数が大へん多い。質問したところ主任は、こういう子どもは感情的にはげしいし、性格的にゆがんでいたりするので、興奮すると、大人対子どもが一対一でなければうまくいかないことがある。こういう子どもたちの集団生活の助けをするために必要であるといいました。

こういう中で、親はだんだんといろいろなことを覚えてきます。子どもの心理を理解し、取り扱いを学んでいくという訳です。また、子どもが先生の世話になっているうちに、一部分の時間をさいて、いろいろなクラスが開かれています。たとえば、料理のクラス、編物のクラス、栄養のクラスというようにです。そういうクラスに参加して、親は家庭生活の技術や職業的技術の一端を学んできます。

私は、あちらこちらでそういう親の姿を見ましたが、誰も皆、きちんとした婦人になっているのにはびっくりしました。最初に来た時は貧しい家庭の人生の敗残者としての親、女であったのでしょうが、今ははっきりと立派な婦人になっているのです。なかには立派な料理の専門家になって、施設の食事作りをまかされている人もいました。先生も大いにほめるし、その婦人も自信ができて堂々（？）とふるまっているのです。また、施設にいる間に勉強して高等学校課程を卒業している婦人はたくさんいますし、通信教育ですが大学を出ている人も全国で約百人いました。これを見て、これこそほんとうの総合的対策だろうと思いました。

Ⅲ、ヘッド・スタート批判される

Head Start は三歳から五歳児が対象ですので、ここでの二年間を修了すると、子どもたちは小学校または Kinder garten（ア

メリカでは五歳だけ）へ行きました。すると、そこで評価と批判が始まってきました。ある意味からいうと、知的能力は増進されているし、性格的にも安定してきたし、見かけも非常に立派になってきたわけですが、しかし、その後、小学校へ行っている子どもたちを追評価すると、成績は上がっていないということが言われはじめました。

Westinghouse Learning Corporation という研究機関が、Head Start 卒業の小学生を評価しました。すると、今まで上がっていた能力が、小学校へはいってから落ちてきた、という結果が出ました。たしかに知的能力は上昇したけれども、それは、特別な保育が続いているだけであって、永続性がない、すなわち効果は上がるけれどもその効果は短命である、ということを示したのです。それで、広く Head Start はだめだ、といわれるむきもでてきました。

それに対して、連邦政府及びその他の新計画推進論者は次のような弁明をしました。それは、受け入れ態勢が悪いのだ、今までやってきた子どもの発達を真に促進させるような方法を取っていないからだ、小学校へ上がったとたんに古い伝統的な教育をおしつけるからだめなのだ、というものです。

政府はヘッドスタートに対する一般の批判に答えて、二つの新しい教育実験をスタートしました。一つは、ヘッドスタート卒業者のために、五歳から八歳の児童のためのフォロースルー（追跡）計画と、零歳から三歳児のための Parent (and) Child Centre 計画の二つです。フォロースルーがヘッドスタートの批判に対する直接的な答えですが、P・C・Cは、同じ原則に基づく教（保）育実験を下の年齢段階に持っていったものです。以下、P・C・Cから始めてこの新しい実験の話をします。

Ⅳ、P・C・C計画生まれる

P・C・Cは零歳から三歳の子どもを対象としたもので、H.S.と同じ計画を下へもっていったわけです。したがって目的も同じわけですが、特にここでは、「子どもの健康、知的、社会的ならびに感情発達に重点を置く」、「具体的に子どもの生活技術、知的技術を改善し子どもの自信を強化する」「家庭の組織を強化し、家庭の全員が子どもの教育に参加するようつとめる」などが強調されました。

そのため、P・C・Cでは、子どもが現在持っている医学的、歯科的、また心理的な問題を発見してそれを治療してやる努力が行われました。実際に、あるところでは、医者がひとりひとりの子どもを診療し、歯科医が歯を直したり、薬を与えたり、その他

の指導をしていました。あの、高い料金を取るアメリカの医者が無料奉仕をしていました。また予防医学的な措置を重視し、定期的に身体検査を行っています。

母親は、ここでもやはり子どもの世話をしながら、いろいろなことを身につけていきます。たとえば、栄養については、バランスのとれた食事を子どもたちのために作る、子どもの寝ている間に栄養に関するクラスに参加する。そこで栄養価についての指示を得るだけでなく、その買い方や予算のたて方をも学ぶ、という具合です。また、編物や経済、社会福祉的な活動も教えてもらっています。また専門のソーシャルワーカーがいて、どうすれば福祉的な援助を受けられるか、などの相談を受けてもいました。

これらの運営はP・A・C (Parent Advisory Council) という親の顧問委員会が行っています。このP・A・Cの構成員の半分以上はその親でなくてはいけないことになっております。日曜や祭日には、家庭全体でピクニックとかキャンプに行き、一緒に楽しんで一緒に生活する、いわゆる家族生活を味わうような指導も行われています。

実際に見て感じたことは、ここでも、母親がちゃんとした母親になっているということです。そしてもう一つ、強く印象に残っていることは、こうした計画を支えている人々の意気ごみです。こういう施設をどこに作るかというと、たいていは、環境の悪いところにある貧しい民家を買って、それを作り直して使っているようです。そこに、所長がひとり、専門家が二、三人、そして子どもたちの親が来て一緒になっていろいろな活動をしているわけです。あまりすばらしいので、私は、きかなくてもよかったのですが、その所長に「どのくらいの給与でやっているのか」とたずねました。そうしたら叱られてしまいました。「金でやっているのではない」というのです。それには頭が下がりました。これだけの総合的な教育、福祉施設は運営も総合的で感心しましたが、従事職員や母親の態度にも感心しました。

零歳児やその他の乳児の場合には、どうしても個別的に世話をしなければならない。そのために、乳児の世話を委託するF・D・C (Family Day Care) を作りました。F・D・Cは乳児の世話をする家庭と婦人を募集したもので、家とか、その一室とか、婦人の人品等をみてから決めて、婦人を一週間か十日間の特別訓練をしています。私がみたあるF・D・Cの家庭では、ひとりの黒人の婦人が四人の乳児の世話をしていましたが、おだやかで静かな婦人で、すばらしい世話をしていました。

D・C・C (Day Care Center) は日本の保育所に当たります。これはもちろん従来からもあったものですが、新しい保育計

画実験がスタートしてからは、この計画に関連した保育所は、この計画にかなり似通った性格で運営されているようです。Shome という新語と新しい施設も生まれているようですが、これは school (and) home を一緒にした新語で、学校と家庭を一緒にしたような新しい施設です。

Co-plus Schools (Co-operatively Planned Urban Schools) というのも新しいもので、都市の中に質的な良い教育を与えるために作ったもので、貧しい子どものためというのではなく、質的に良いものを提供しようというものです。

After School これは六歳から十四歳児を対象にしたもので、日本にもあるように、親が勤めていて子どもの帰宅時に家にいない、いわゆる鍵っ子を救うためのシステムです。

V、干渉政策としての実験計画

フォロースループログラムにはいる前に、ここで考えてみたいことがあります。それは、こういう新しい実験計画は一種の強力な干渉政策である、ということです。従来の中産階級の普通の教育理念は、子どもの発達は自然にまかせておけばよい、知的な展開にしろ、性格発達にしろ自然に成熟するのを待っていればよい、というものでした。ところが、アメリカの低階層の子どもを取り上げる場合、そんなことではどうにもならない、ということを見いだして、思いきった総合的な社会福祉施策を含む干渉政策を打ち出したわけです。子ども自身の発達を正常に近づけるためには、親自身の生活の立て直し、家庭経済の支持、親自身のしつけ方の検討と見直し、子ども自身の身体的世話など全部を包含したものを、連邦政府、地方政府、地域社会、地域内の各種の職能的福祉団体、ボランティヤー奉仕者などを、打って一丸とした組織のもとに展開している干渉政策的実験です。干渉という言葉が強すぎれば、社会福祉的教育実験です。ただ一つ注目すべき特徴は、当の子どもの親と家庭がこの教育実験に参加していること。自分自身がこのプロジェクトの一員として参加し、また、すなわちプロジェクトの運営顧問委員会において、主導的役割を与えられていること、すなわち問題の解決を自分自身の手にゆだねられていることです。この点は従来のこの種の福祉的教育施策とちがっている注目すべきことです。

干渉というと言葉のひびきが強いですが、考えてみると、あらゆる教育は干渉だと思います。家にいる子どもを、一定の年齢になって集めてきて学校に入れるこれが現在のあらゆる国の教育の姿であって、それは程度の差はあれ、一種の干渉的施策であって、ただ従来からずっとあったために気がつかなかったのにすぎ

ません。しかし前述したヘッド・スタート、P・C・C、またフォロースルー等は、もっと強度の特定目的をもった干渉的施策であります。普通の子どもの場合には、幼稚園、保育所、小学校等において、子どもが教師の指導のもとに共同生活をしているあいだに、おのずと成長学習してくるのを待てばいいとされていた自然主義的、自由主義的教育の方法とは非常にちがっているこの種の教育施策には、考えるべき幾多の問題があります。

私はこの世紀の実験に強い印象を受けて帰ってきました。このプロジェクトを推進している人道主義的精神、プロジェクトに関係している人たちの心意気、またプロジェクト過程に見ちがえるように立派になっているような低階層の婦人たちを見て、感銘をおぼえました。しかしこのプロジェクトをわが国の保育や教育事情に結びつけて考える場合、いろいろな問題が浮かんできます。

わが国の子どもにこういう総合的対策をとることなどは考えられないにしても、このプロジェクトで使っているテクニークの一部などは使えるかもしれない、ということが考えられます。しかしこの問題はまだ検討が行われているわけではありません。たとえばセサミ・ストリートがいい例です。ああいうテクニークはアメリカのプロジェクトに登場する子どもたちにはいい方法であるかもしれませんが、あれをそのまま普通の家庭の子ども、または日本の普通の幼稚園児、保育園児などに適用していいかどうかということは別問題です。その他この強力な干渉施策的なプロジェクトの考え方と方法を、普通の保育に使っていいかどうかということは検討を要する問題です。

またプロジェクトには、かなり知的発達と知的改善に重点を置いているむきがあるようです。これもプロジェクトがソ連のロケット打上げにしげきされて出発したことと、アメリカの低階層の子どもたちの実状を考える場合、当然かもしれません。そして特に知的発達を促進するように設定された環境の中で子どもの活動を行わせているのも、うなずけることです。しかし、普通児の場合は、今まで以上に特別な環境設定が必要なのかどうか？　子どもは与えられた環境のなかで、自ら環境を作りかえ、環境作りをして自己活動と自己経験の中に学習し成長しているのであって、その趣旨を忘れていたずらに速成的に出来上りすぎた環境を提供することには問題があると思います。もちろん見てきたものの全部がそうであったというのではありませんが、そういう心配を感じさせたものがありました。自由保育的に伸びている子どもに、プロジェクトの方法を持ってくることには慎重な考慮が必要です。セサミ・ストリートのことは既にふれましたが、ああいう機械的な記憶による学習は、言語の場合、ある意味で有効でしょう

が、あの種の学習に頼っていたのでは人間の頭の働きを機械的にして、抽象的、論理的能力は育ちません。

V、フォロースルー（追跡）実験

フォロースループログラムにはいります。フォロースルーというのは、先に述べましたようにヘッドスタートからスタートした子どもたちが、その後小学校へ行ってからだめだといれれてしまって、それを救うために計画されたもので、現在では全国で八万一千人の子どもを対象として実験しています。この計画は、連邦政府がいろいろな大学の教育学部や専門的な教育機関あるいはその他の施設に委託してそれぞれ独自に運営してもらっており、全国的に分布して、各ちがった機関がその運営に当たり、三十いくつの実験が進行中ですが、そのうちからここでは六つだけ取りあげてお話いたします。

今までのヘッドスタートでもP・C・Cでも、子どもの生活指導、学習指導については、いろいろな教育学者、心理学者の理論や意見が取り入れられているようです。たとえば、デューイイ、ピアジェ、フロイド、スキーナー、ハントなどの違った立場の理論が入っているようです。そしてそれを各施設、各機関ごとに、総合してやっているようです。しかし追跡プロジェクト（フォロースルー）では、実験を委託された機関が大学、大学の研究所、または独自の研究機関であって、または、そういう機関の指導の下に実験が運営せられていますが、これらの機関の実験の運営は、一〇〇%、独自の自主運営です。どんな理論にもとづこうが、どんな方法を使おうが、すべて自主運営が許されています。したがって各実験機関は各々独自の理論と方法を持っているわけで、それらの方法を比較すると興味深いものがあります。時間の関係上ここでは次の六つだけを取り上げます。

1、Bank Street College of Education

ニューヨークにある小さいけれども教育学部大学として有名な大学です。ここの立場を簡単に述べますと、

㈠子どもは自分自身の学習に自律的に参加するのであって、大人は子どもの世界を拡大し、経験の持つ意味に対して敏感にしてやることによって、その自発性を助成する。

㈡児童は、自分自身について、自己診断的でなければならない。

㈢学習環境は子どもの興味や状態の変化と成長に合わせて絶えず再編成しなければいけない。

㈣子どもの興味を、家庭や学校以外のより大きい社会へと拡大してやるように、環境作りを計画的に行う。

㈤具体的な方法として、教室は広汎な経験を包含し各種の作業を許す各種作業領域に組織する。

ということになりますが、最後の具体的領域作りというのは、どういうのかといいますと、これは日本ではあまり見られないことですが、教室の中がいくつかに区分されているのです。このコーナーは〝地域社会〟このコーナーは〝友だち〟このコーナーは〝家庭〟このコーナーは〝遊戯〟という具合になっているのです。そしてそれぞれのコーナーには、その領域に関するおもちゃや資料が置かれています。子どもたちは好きなコーナーで活動していて、そこがあきると次のコーナーへと行くというわけです。これが組織され、計画され、準備された環境だというのです。

たいへんおもしろく思ったことですが、たしかに学習能率は上がるでしょうが、問題はあります。人間の社会はこんなものではありません。日常、社会にはある領域だけあるのではありません。いろいろな領域が混在しているのです。こういうように興味を分断しておいて、もし子どもがあることだけに集中してしまったらどうするのでしょう、と思いました。

ここでも両親は、教室活動に参加し、また社会的な地域活動にも参加していました。

2、High Scope Educational Research Foundation（ハイスコープ教育研究財団）

ここは、カーネギー財団が出資しているところですが、行ってみると、一見工場のような教室がありました。大きくてだだっ広い所を使ってそこにいろいろな教材となるものが置いてあるのです。まん中には、子どもたちが上っていくように中二階が作ってあります。またかなりの機械が置いてありました。のこぎりもなたもその上まだ子どもたちには使いこなせないような機械や道具もあります。まるで一見工場の印象です。ここに子どもたちが来て勝手に遊ぶのです。

「これで何を教えるのか」と質問してみました。「もちろん知的活動は教える、知的能力も学んでもらう、その他あらゆる性格的なものも学んでもらう」というのがその答でした。また、算数はどうするのでしょう。「算数は教養だ」「絵もことばもみんな教えるのだ」「教科書も作ってある」ということです。自分の活動それ自体が経験になって学ぶのだというのです。ここは、かなり知的な能力の開発に力を入れているといわれているところですが技術的なものを多く学ぶでしょうが、情操教育はどうなるんだろうという、日本人的な疑わくを持たざるを得ませんでした。

外では、夏休みだというのに先生が汗をいっぱいかいて大きな古材を切っていました。子どもの遊ぶところ、同時に勉強すると

ころを作るのだというのです。その熱意にはうたれてしまいました。

ここの理論をまとめてみますと、

(一)子どもが実際活動に参加することを強調するオープン教育計画（子どもが自由に活動を選択する）

(二)子どもの発達に対して徹底して組織的計画的な教育方法を用いること。

(三)子どもの発達の段階を絶えず評価し、それによって次の適当な教育計画をたてる。

(四)研究所の教育方法は知的思考型で、子どもの考え方と大人の考え方との違いを絶えず念頭において計画し指導する。

(五)子どもが一生涯使うような思考技術を養うことを中心の課題とする。同時に学科目的な能力もこれにつけ加えて与える。

(六)ただし学科目的な能力よりも学習の方法や態度を強調し援助することに重点を置く。

(七)学習は必ず経験的活動的でなければいけない。すなわち子どもが環境に働きかけることによって学習は起こる。

3、University of Florida Parent Education Model（両親による教育参加計画）

アメリカ東海岸の南部にあるこの大学では、親が子どもの教育に直接参加できるようにすることに重点を置いています。親は子どもの感情や知的発達の要であると同時に、子どもを指導し子どもの教育に参加する特別な資格を持っている、という考えから、親を教育することによって家庭に働きかけるのを目標としています。そのためには、学習や作業は家庭と学校で共同してやれるようなものが計画されています。そうして、この計画に参加している親たちは、教師の助手として、またほかの親たちの教育者として訓練されるのです。

4、University of Arizona free choice of activities

ここでは、子どもに自由に活動させることを主として、大人もこれに参加して、集団で教育を行うことを主張としています。子どもは大人をまねて行動し学習するのだという信念に基づいているのです。また、子どものひとりひとりは、自分で学習し自分で成長することを欲している、自分の方法で自分のペースで学習する、という活動の自由選択の理論を採用しています。

5、Engelmann-Becker Program（エンゲルマン・ベッカー法、またはエンゲルマン・ベライター法）

Engelmann-Becker (Bereiter) は、徹底した behaviorist として有名な人たちです。その主張は、〃あらゆる子どもは適当な教え方をしさえすれば何でも学習できる〃というものです。その適当

な教え方といっているものをあげてみましょう。

㈠学習は hard work であって、ハードワークは必要なものだ。

㈡子どもは注意深く組織された小学習段階ごとに、学習技能を適当に分割した方法で学習させる。

㈢教師のなすべきことおよび学習者のなすべきことは特定すべきである。（こういう課題にはこう教えこう答えなければならないなど）。

㈣積極的な強化は、学習活動を保証するだけでなく、くり返し行う学習活動を増大するための根本的条件である。

㈤一斉に応答するような集団的方法は、子どもに学習させるための能率的な方法である。

㈥子どもはまちがいをすることを許してはいけない。

㈦正しい答をするために、子どもは自分のなすべきことを理解し、正しい答が何であるかを理解しなければならない。したがって教師の基本的役割は子どものまちがいを分析することである。

㈧スピードは子どもの興味を保持するために有用である。

㈨子どもは大人の見本から学ぶ。

これらが有名な（エンゲルマン・ベッカー《ベライター》）方式で、彼はこの方式によってどんなことでも従来考えられてきた年齢の段階よりも早く教えられると主張しています。これが早教育の本山的主張で徹底的ビヘービアリズムです。

6、Far West Laboratory Program（ファ・ウエスト研究所計画）

この計画の特色は、子どもに対する態度としてはどの計画に比べても放任であるべきだ、という点にあります。教師は学習方法の計画者であり、その材料の調節者であるが材料は提供しておけ、しかし放っておけ、というのです。

子どもはやっているうちにおのずと学習しその結果からおのずと強化されるので、わざわざ強化する必要はない。また、ある一定の時までにとか一定の順序で学習しなければならないという材料はない。いかにして学習するかということを強調すればよい、といっています。したがって理想的な学習環境は学習者の側における自由探究ならびに自由活動にある。また、教師のすべきことは子どもの要求に応え、その必要に応ずることであるというのです。

これで各大学教育学部、研究室、研究所などのフォロースルー追跡実験の原理と方法についての叙述を終わりますが、もっといろいろちがった類型をあげることができなかったこと、また取り上げたものでも、もっと詳しく述べられなかったことが残念で

す。しかし取り上げたものだけでもいかに実験が多種多様であるかがおわかりでしょう。したがって追跡実験を簡単に評価し批評することはできません。各々個々別々の考えと方法を用いて実験をしているからです。だがこれらの実験はＰＣＣやヘッド・スタートの場合とちがって、個々の実験がはっきりした理論の裏づけの上に行われていることは興味があります。いずれにしても、実験はスタート以来二、三年を経過しました。これらの実験がどういう結果をもたらしたかは知りたいところです。いくつかの評価方法が用いられて、結果の研究が行われておりますが、ここでは私の眼に止まった最も印象的な評価の結果を紹介いたします。

Ⅵ、追跡実験の評価

前述したように、追跡実験はいろいろの角度から、いろいろの方法で評価が試みられました。まだ未定のことも多いですが、結果のなかから、一、二の注目すべきものを抜いてお話いたします。

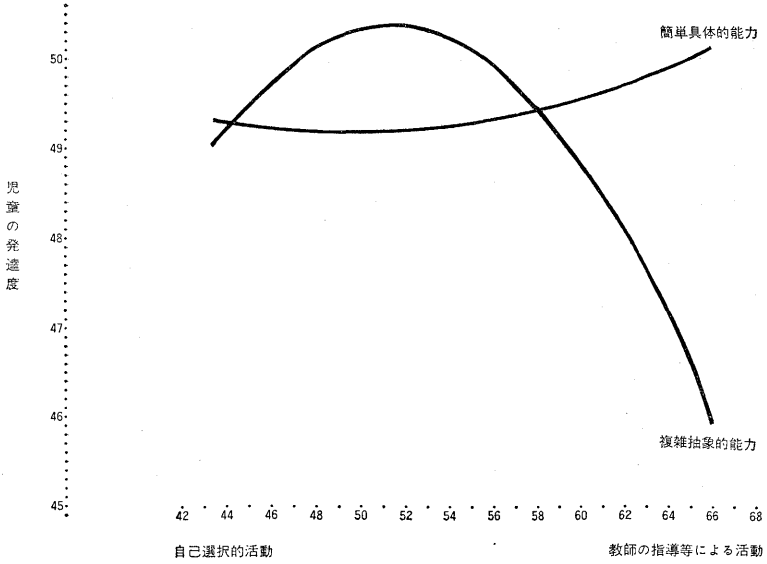
一、この年齢において、複雑な思考技術を多く与えようとした場合は、うまくいっていないようであります。このことはピアジェの発達理論から言って、この年齢の子どもがいわゆる前操作期にあることから、抽象的操作を期待できないという立場と一致するものです。ただし、実験の対象児はすべて欠損的条件のものであったことから、このことが、欠損家庭以外の児童に当てはまるかどうかはまだ決められないでしょう。すなわち実験結果は児童の発達段階を示すものか、または欠損児の発達段階を示すものかは、まだ決定できないということです。データの示すところは、これらの児童は行動を言語に結びつける簡単な作業、またはその逆の作業から利益を得ることが多いということです。これはほかのデータからも確かめられています。年齢相応以上の高度の思考作業は利益をもたらしていません。

二、学習について児童の活動にどの程度の自由、自発性を与えるのが、学習上より効果的であるかという問題はソアー(Soare)夫妻によって、いわゆる正常児（？）の三年生から六年生までを通じて検討されましたが、その研究によると、児童の活動の自由度とこの学習能率は、学習作業の複雑さと抽象度に関連があることが示されました。大ざっぱに言えば、より大きい自由度がより大きい児童の発達をもたらしたという結論を示す研究が見られます。もっとこまかにいうと、

「取り上げた対象に関する限りでは、適当に高度（中度）の自由度が、児童の複雑な発達をもたらすためには、最も効果的である。同時に簡単な学習は、教師の指導によって増進せられ

児童の自由活動対教師の指導による活動

—その発展的効果比較—



るが、それは、複雑な抽象的発達を犠牲にするということを、示すようである」

こういう結論はソアーの正常児の実験資料を欠損児の場合にあてはめて考察しても同じ傾向がみられました。この結果をグラフにしたものの一つが上のグラフです。

数字については説明いたしませんが、横軸は、左端が児童による自分の活動の自由選択度、左にいくほど、その程度の高いこと、また右端は教師によって指導された活動の程度、右に寄るほどその指導度の高いことを示します。その線の一つは児童の簡単な具体的（作業）能力を示し、も一つの線は複雑抽象的（作業）能力を示します。縦軸はそれらの能力における児童の発達度を示します。

このグラフによって見ると、

(1)教師によって指導された活動が多いほど複雑抽象的能力の発達は落ちています。

(2)複雑抽象的能力を生み出す最上の条件は、自由度と指導的活動のバランスがとれた状態にあります。

(3)簡単な具体的（作業）能力については、教師によって指導された活動が増加するにつれて増加しているようです。

(4)グラフをここに示すことをしませんが、右端に訓練度（ドリ

ルをとり、左に児童の創意性度をとって作製されているグラフがありますが、このグラフの傾向が、ここに示したグラフと全く同一の傾向を示しています。

このことから、適当以上に訓練を加えるとか、児童が教師の指導の活動を行うことは、複雑抽象的能力の発達に有害であることが示されているものと言えます。適量以上の「教師の指導、教師のコントロール、ならびに狭い学科目焦点的指導」は、複雑な抽象的発達にとって有害であるということです。

(5)これと逆に、複雑抽象的能力の最善の発達のためには、児童の自由度、創意度、自己指導にも限度があることが示されているようです。

右に述べたことが、ソアー夫妻による評価の一端であるが、この評価は現在の教育にとって極めて重大な意味を持つものであります。

Ⅶ、結び

話を終えるに当たって総括的な考察を加えて結びにします。

(1)、アメリカで現に行われている保育・教育実験は、まことに画期的なもので、低階層の子どもを救うためには、ああいう方法が最善のものではないかと考えます。家ぐるみ、親ぐるみ、地域ぐるみに、子どもの全面的発達を求めようとする干渉的な指導が望ましいもののように思えます。ことに関連従事者の意気ごみには、深い感銘を受けました。

(2)、この方法をそのまま、いわゆる正常児に適用することはもちろん問題がありましょうが、その部分的使用を考えることはできるかもしれません。ただし対象その他環境的条件がちがうことを念頭において、検討することが必要でしょう。

(3)、追跡実験は対象が幼児ではないが、ヘッドスタート後の児童がどうなっていくかは、今後注目して見守るべき課題であります。

追跡実験の結果はまことに興味深いものがあります。現在ビヘービアリズムに準拠した学習指導法が内外でかなり盛んに行われているのを見ると、ソアーの評価に関する研究結果は、高く評価さるべきであって、現在日本においてもしきりに行われている幼稚園児、保育園児の文字や数の指導など、とくと反省すべき問題がありましょう。セサミストリートについても、ああいう教育方法の持つ欠陥を知っておく必要があります。

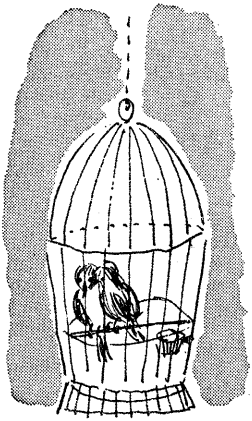
(4)、ヘッド・スタートにしろ、P・C・Cにしろ、その施策が対象児童の知的発達、情緒的発達、身体的発達、性格的発達、健康のすべてにわたって改善することを考えたもので、また施策自体

も家ぐるみ、地域ぐるみのものであることは、繰り返し述べましたが、実験結果の評価の段になると、もっぱら知的角度だけが主として、浮かび上がっているようです。欠損児童の場合、これさえおさえれば、あとは同時に改善されているということかもしれません。しかし、実験結果を正常児にあてはめて考える場合、知的発達だけを考えればいいというわけにはいきません。追跡実験の場合には、とくに、知的評価だけが著るしく眼につきます。問題を自分のものとして考える場合には、この点とくに注意を要することと思います。

(5)、追跡実験の形態のパターンは、ごらんになったように、多種多様で、考え方において正に正反対のものさえありますが、この多様性を許しているところに、アメリカ的な考えの特徴があって、今後この実験から生まれてくる結果を見守りたいと思います。このぼう大な実験の中から、新しい教育思想が生まれてくるかもしれないと思います。

(6)、アメリカの人工衛星の打ち上げは、そのための必要として無数の新しい科学技術を生んで、それは現にあらゆる分野で使用されております。ヘッド・スタートに始まったアメリカの巨大な教育実験も、また多くの新しい副産物をもたらすにちがいありません。刮目してその成果を期待したいと思っております。

○ これは、お茶の水女子大学での集中講義を、学生さんが筆記してくれたものに、かなり加筆しました。また、このアメリカの視察は、玉川学園大学の藤田復生教授と同行しました。



お知らせ

さきにお知らせしました〝みどり会夏季研修会〟に、お茶の水幼稚園々長　勝部真長先生もご参加、講演をしてくださることになりました。ご多忙の中、お繰り合わせくださいましたのでお知らせがおくれました。どうぞご期待くださいませ。

幼な児をはぐくむ自然

室谷幸吉

歌は気持ちが温いとき、湧くように唇からあふれ出てくるものです。場所は家の前の三メートル道路、史子は今、体いっぱいの幸福感にみち、ママとつかず離れず、近所の奥さんと立ち話しているママの声を、聞くともなく聞きとっています。史子は二歳三ヵ月です。道ぞいのドウダンのいけ垣の根かたにしゃがみ、足もとの土を指でいじりいじり、

デンデンムシムシカタツムリ
おまえのあたまは　どこにある
ツノだせ　ヤリだせ……

格調正しい歌いぶりです。

「Xちゃんもいっしょに歌ってごらん。歌えるでしょ」

近所の奥さんの子どもX君は、史子よりざっと一年年上です。X君は首を横ざまに振り、キッとしたしぐさで歌えないことを示しました。

「この子、そんな歌知らないのよ」とX君のママ。

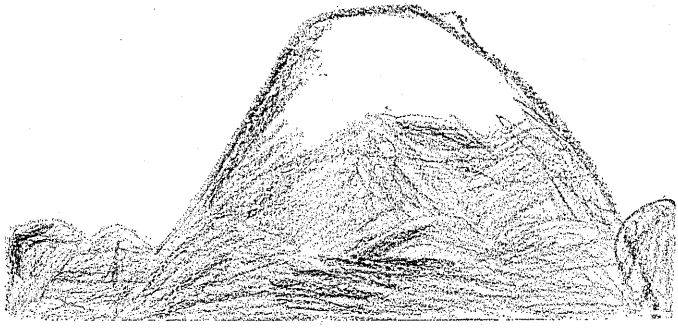
「デンデンムシ　知ってるでしょ。カタツムリを、さ」

またX君はきつく頭を横にふりました。X君のママが、

「カタツムリ見たことないのよ。テレビならくさるほど見てるけど」

「X君、じゃ、どんな歌知ってる?」

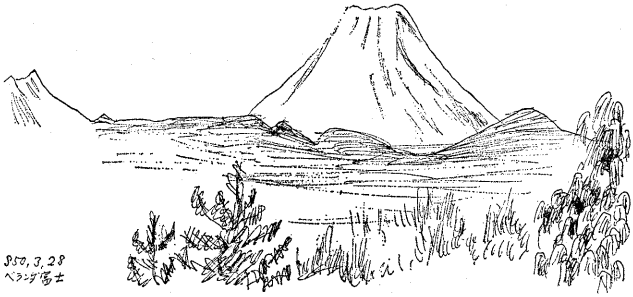
史子のママの声にこたえX君が歌い出したのは、テレビのコマーシャルソング。その時史子は『メダカの学校は川の中　ちょっとのぞいて見てごらん……』を歌いおわり、『スズメの学校の先生は　ムチをふりふりチーパッパ……』、そのメロディーを半分ほどで切りあげ、つづけて『春ははよから川べのアシで　カニが店出しトコヤでござる』と歌い移っていました。たまに時間ふさぎにテレビマンガを見る程度の史子には、CMソングのお相手はでき



史子画

ません。だが史子の歌のレパートリーは相当に広く、その歌のほとんどは、たとえばメダカの歌は水槽のメダカをのぞきつつ、デンデンムシの歌は庭木の葉に乗ったほんとうに動くカタツムリを見つつ、つまり実物に触れ、その物にくっつけて覚えたものです。テレビという虚像世界から見知ったものは、大体根無しの造花、命のかわいたでっちあげでしょう。それに比べ史子の歌（学び）にはしかとした根がある、根があるから生きている、生きているから創造的展開が見込まれる、こんなふうに言えそうです。商業主義の色に染まったCMソングと、いのちある物との接触から盛りあがった歌ことばと、かりに〝文化〟というはかりにかけた時、目盛りはどんなふうに読めるでしょうか。デンデンムシを歌う時、史子の頭の中にさまざまな模様の大小のカタツムリが這い回り、あるいはツノをのばし、あるいは、首を殻にひっこめているでしょう。カニの床屋を歌う時、史子の目にはハサミをふっているカニが見えるかもしれません。史子は夏の一日、「バァバ、カノデンデンは？　カノデンデンつけて」と祖母に催促しました。カノデンデンは蚊取線香につけた史子の創作名詞（複合語）で『蚊をとるのに使うデンデンムシ型ウズマキ』そんな幼児の考えが、陽をすかして見る絵ガラスのように鮮かに察せられます。

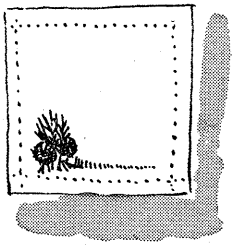
　てのひらほどの小さな庭の一隅に砂場を用意しました。X君も△ちゃんも近所の子らがこの砂場で遊びます。多様な形のプラスチックのアキ容器が散乱しています。器に砂を詰め型ヌキし、オマンジュウが並び、人工衛星が打ち出され、マリや同じ形の地球が……そ



そんな技術を二歳にして史子は心得ました。シャベル振りたてバケツで給水、当然のことに上衣の袖はベショベショ、服は泥でベトベト——母なる大地というと大仰みたいですが、命の根をはぐくみ、その命の還りゆく郷である土、幼な児は土とひとつにして育てる時、たくましくも賢くもなることを史子によって実証しつつあるわけです。生後一年近く汚れた空気の都内に住み、カゼひきやすく顔色さえずひ弱かった体が、現在地へ転住して二、三ヵ月で、早くもリンゴほっぺになり健康への効果が見えました。今はプリプリして力が体にあふれ、知恵づきのテンポにひそかに驚いています。スズメもウグイスもカラズもミミズもコオロギもスズムシも、みな実物教育です。ウメ・モモ・ナシ・グミ・カキ・クワれにもまして史子には、アリンコの散歩道、アリのアパート作りの楽しめる砂場です。植木用シャベルで土を掘る、草花を移植する、の実すべて成り木による実物知です。白、赤、黄、桃、紫、青、緑、色名、色あいも庭に咲く花によって知ったようです。クリのイガも栗拾いも庭で味わい知った秋の体験のひとつ。草引き、除草ですね。これまた見よう見まねでのみこみ、庭でひとり遊びしているが、とのぞいてみると草取りしています。引抜いてはいけない草花と、除いた方がいい雑草、ハコベ・オオバコ・ペンペングサ・スズメノテッポウ・ヤブカラシなどを教えるともなく区別できるようになったとはすばらしい。

身のまわりを彩る数々の自然物、ゆたかな自然のなかに開放され行動の自由を得た時、子どもがいかに多くのものを成長素としてその自然から吸収するか、そのめざましさに驚く、日々です。

私の保育



平野信子

春休みの幼稚園はガランとしている。

園全体が眠っているように静かだ。

みんなで追いかけただいじなサッカーボールは、つるつるにすりへってしまっている。かわいがられ、いつも病気でベッドに寝かされていた赤ちゃん熊は、うす汚れた熊に。

物がみんな変わってしまう。子どもたちが輝きながらジャンプして行ってしまうと何もかもが生彩を失い、はりきっていた私までも少しくたびれた大人に戻ってしまった。

私が保育者として生活を始めた年に生まれた子どもが、この四月に小学校に入学した。この六年間の急速な成長、その間に、私はどれだけ成長しただろうか。

常に湧き出てくる疑問、六年間の経験による強引さ、新な目で保育を見直すことのむずかしさ、保育が終わり、ひとりになった時の迷い、悩みが大きくふくらんでくる。

この機会に一年間に強く感じたことを考え直してみたいと思う。

☆　☆　☆　☆

子どもがひとつの遊びをじっくりと考えながら進める姿を見て保育者は、集中力がある、と考え安心する。が、反

面、同じ活動が毎日続くとこんなことばかりしていていいのだろうかと不安にもなってくる。

五歳児になり、子どもたちがいちばんよく遊んだのは、おうちごっこ（基地ごっこ）である。女児も男児も二～三人の気の合う仲間と一緒に家を作っている。テレビのうしろ、ピアノと棚に囲まれた場所、材料棚の横など、四角い部屋の中で見つけることができるすみを全部使っている。その家で絵をかいたり、あき箱で何かを作ったり、絵本を読んだりの生活が四～五日間は続く。私の眼には毎日似た遊びをくり返しているようにうつり、『外で力いっぱい走らせいたな』と思う。

「ねえ、外に行ってワニごっこ（鬼あそびの一種）をしてきましょうか」

「いやだよ、ぼくたち遊んでいるよ」

「ずっとしているんだもの、少し外へ行って来ましょうよ」やっと外へ出してしばらく遊び、部屋にはいるとまたおうちごっこを始める。

このように長く続く遊びには、たとえ大人には無意味に見えても、子どもにとっては大切なものがひそんでいるのかもしれない。保育者がおうちごっこばかりしていることを否定的に眺めていても、遊びはよい方向にはいかないので、徹底的におうちごっこをさせることにした。

水道屋さんからもらった蛇口と木箱とで作った流し台。みかん箱をふたつ使って作ったミニ冷蔵庫。子どもと一緒に遊ぶとアイデアがつぎつぎに浮かび、材料を用意するとつぎつぎに道具ができていく。のこぎりの使い方も慣れ、冷蔵庫の棚も少し斜めについているが丈夫についている。ままごとコーナーを囲む壁は牛乳のあき箱をボンドとガムテープで積み上げ、屋根にした青い布には、交替で縫った白糸のくねった道がついている。どれも力を合わせ一生懸命に作ったものばかりだ。何よりもおもしろいと思ったのは、人の出入りが多くなったことである。ホールの大積木で家を作っていると、『お水を飲ませてね』とやってくる子ども。『どうして水が出ないんだよ。つまんないの……。貸してもらうよ』とくる子ども。子どもたちだけでなく他の保育者もアイデアや材料を出してくれ、また併設されている小学校の主事さんも板に丸い穴を開けるのを手伝ってくれた。が、みんなで作った道具、そして家を使ってのおうちごっこは長く続かなかった。しばらくすると、またやのすみや積木の家に道具を運びこみ使っている。

積木の家は、ほとんど毎日作られた。四方の壁を作り、小さな窓と狭い入口を開ける。

屋根は板積木を渡すので、中は暗く、狭い所に何人もがはいっている。時々は私も入れてもらうがお客さんとして扱われてしまう。

子どもたちがどんな気持ちで家の中にはいっているのか知りたいと思い、〝留守〟になった家にひとりではいってみた。首をすくめ、足を曲げないとすわることもできないせまさ。そして暗い中にいると、自分自身の息使いが聞こえてきそうになる。すき間ほどの小さな窓からのぞくと外がいつもと違った世界に見えてくる。他の人は自分のことに気づかず、自分は人のことを見ている。……思わずクスクス笑いたくなるくらいおもしろい。外に出ると内から見ていた景色が急に平たくなってしまった。

おうちごっこは、日常の生活空間にひとつの囲まれた別の世界を作ることなのかと思われる。

☆　☆　☆　☆

おうちごっこをしている子どもを鬼遊びに誘うとき、これまでは自分から遊びたくなるまで待ったり、働きかけたりしていたが、ことしは、われながら驚くほど強引に誘っている。このように生の感情をぶつけるようになったのにはN男の役割が大きい。

N男はいつもひとりで何かを作りながら、友だちの遊びをはいりたそうにしながら見ていた。自分から働きかけて入れてもらうことはできず、時々誘われるとうれしそうにはいっていった。

保育者としては、自分自身の力で遊びにはいれるようになってほしいので見守っていたいのだが、つい「入れてもらったら」と声をかけてしまう。するとはにかんだままスーッと退いてしまう。

こんなやりとりが何回もあったある日、やはり、スーッと引っこんでしまいそうなN男に思わず、「Nちゃん、はいりたいのにどうして行かないの。誘ってくれるのを待っていないでがんばっていらっしゃい」とお尻を叩くように押し出してやった。

それ以来、N男は何かがふっきれたように友だちの中にはいっていくようになった。

保育者の心がまえとして子どもを受容し、子どもが自発的に活動できるようにと考えているが、時には意識して否定的感情をぶつけることも必要なのではないかと思う。

自分の感情を素直に出すことは、本当にむずかしい。

☆　☆　☆　☆

東京のまん中、自然に恵まれず、コンクリートに囲まれた中に私の勤める幼稚園はある。そこに去年、小さな芝生の庭ができた。

これまでは砂場ではだしになれない子どもも、きれいな遊びしかできなかった子どもも、みんな芝生の上にころがしてしまえとばかり、強引にはだしにさせてしまった。

うれしそうにひっくりかえる子ども、

「ひゃあ、足が冷たい」と声をあげる子ども、そっと足を縮める子ども。

芝生は、いろいろな気持ちの足をやわらかく受けとめてくれた。

けがの心配をしないで思いっきりできる、すもう、かけっこ。

砂をかけ、もものあたりまで埋めてしまう子ども。遊びがしだいに違っていった。

はだしを気持ち悪がっていた子どもが、登園するとすぐ、くつ下を脱ぎ、室内をペタペタ走りまわるようにまでなった。

夏のある日には、水まき用スプリンクラーを回し、その下をくぐりぬける遊びが始まった。キャッキャッと走りぬけ、あるいは、水しぶきに体当りをしていった。顔も洋服もぬらし喜々としている子どもの顔。ぬれた洋服を自然乾燥するためにコンクリートに寝ころんでいる子どもの顔。そこには、「発散」「解放感」ということばでは言い足りない何かがあると思う。

芝生の庭ができる以前は、砂場、ぶらんこ、すべり台のある庭、屋上と三方に遊び場がわかれていたので、子どもたちは目的をきちんと持って遊び場へ行った。が庭ひとつになると、いろいろな遊びが集まるようになった。また小さな庭なので互いの遊びがよく見え、おもしろい遊びに子どもたちがはいるようになった。クラスの意識でなく、おもしろい遊びによる子どもたちのうずまきができた。

☆　☆　☆　☆

保育者として、子どもたちの成長にどんな手助けができるかと考えたとき、とてもむずかしく何もできないように思われる。が、私にできることを考えたとき、全力を出して子どもたちとぶつかりあい、はずんだ生活をしていきたいと考える。

（千代田区立富士見幼稚園）

〝始まり〟と〝初め〟

渡辺祝子

始まりと初めとは似たような言葉であるが、まったく異った意味が含まれているように思う。私たち現職にある者は、この二つの言葉の違いを痛切に感ずることが、日々の保育の中でしばしばある。

〝始まり〟

まずこの言葉から連想されることは、入園式である。子どもたちの肩のあたりが緊張で固くなり、張りつめた気持ちが大きなため息となって聞かれる時、小さな胸のうちは極限に達している。式の時間をいかに短かくしたらよいか、むしろもっと別の方法はないものかとさえ思いたくなる。

このように集団生活の中で経験する「始まり」はあらかじめ保育者側が計画準備したものである。したがって子どもの発達を考え、無理がなくゆとりのある活動がとれるように計画をたてることが必要となってくる。

〝初め〟

今までに経験したことない場面に直面した子どもは、非常な好奇心と興味をもってそれにぶつかっていこうとする。そして経験をつみかさねることにより自信を得て成長していく。「初めて」の場に直面したときその感動をうとけめ、子どもたちに満足感をあたえられるような保育者になりたいと願っている。

〝始まりと初めが出会ったとき〟

登園をしぶっていたA子はちょっとしたきっかけをつかみ、進んで登園するようになった。

母親は「A子が自分からはじめて『行く』といいました」と感激して報告にきた。これはまさに「始まり」と「初め」の出会いである。

このように一致した時、子どもは力強い一歩を踏み出すことになる。こうした一歩を踏み出すまでの時期は保育者がどのように待つかによってわかってくる。子どもの芽を充分のばす場合と反対につみとってしまう場合とがある。ここに幼児教育のむずかしさがある。一人一人の成長の過程を見つめ考えるとき、もう一度自分の保育をふり返って見たくなる。

（まんとみ幼稚園）

保育の心の初め

中村美智子

おべんとうの時間、誰もいなくなった園庭の前をなにげなく通りかかった時、砂場の脇の水仙がスクッと陽の光に向かって伸びているのが目にはいりました。日に何度も通る場所なのに、いちいち気を止めて見たことがなかっただけに、その花の美しさに一瞬心を奪われました。

ちょうどそこを通りかかった女の子に、

「みっちゃん、おはながみんなあっちを向いているわね。どうしてかしらね」と、思わず声をかけますと、

「あのね、おすなばであそびたいから、みんなといっしょに。でもね、できないから見ているの」と、じつに幼児らしい発想の返事が、即座にかえってきました。

ほんの数秒間、私の肩に手をおいて水仙を眺めますと、女の子はスキップでお部屋の方へはねていってしまいました。

私は、このとき、花は光の方に向いているのだということしか考えていませんでしたから、大変びっくりしました。

（ああそうだ、ここは子どもの園だった）

ひとりで水仙を見た時、私は、園にはいてもただの大人にすぎなかったのです。もしも女の子が何も言わなかったら、私はその子の表情も見ずにつまらない理屈を口に出していたかもしれません。そうしたら、水仙は女の子にとっても私にとってもただ美しい水仙で終わってしまっていたでしょう。そう思った時、何かが私の体にずしんとぶつかった気がしました。

少し保育に慣れると、無意識のうちに子どもに接する時とそうでない時をうまく使い分けてしまうこともありそうです。しかし、いつでも幼児の気持ちをくみとれる準備がなければならない。語りかけ（無言のそれも多いのですが）をよくきいて、そこからひきだしながら幼児の心を育くんでいかなければならない。〝保育の心の初めは〟と自分に問い続けていくことを忘れてはならないこと、そうすれば感激もより深いことを、このつかの間の触れあいにも痛感したのでした。

（千代田区立錦華幼稚園）

始まり

赤間峰子

四年前、私が「幼児の教育」の編集のお手伝いをさせていただくことにきまった時、それは本当に〝初めて〟の〝始まり〟でした。ともかく月刊誌というのは月に一回は読者のお手もとに届くように、それも〝いい加減〟ではなく、できるだけ皆さんの希望にそい、それよりも、今成長しつつある子どもたちと大人とのよいかかわりを作るためということがまず大切な、すばらしい仕事なのだ、と思いました。でも、長い主婦生活で世の中を見る目の狭くなっていた私にとって、最初は、正直いって、〝大変な仕事〟でした。でも、周郷先生、津守先生、本田先生、そしてお茶の水幼稚園の諸先生方、さらに執筆者の方々は実に辛抱づよく私を見守って助けてくださいました。フレーベル館の方々も私のような脳の固まりかけた中年のおばさんを、よくぞ仕込んでくださいました。このごろではやっと、一冊の雑誌ができあがるたびに、〝ともかく一生懸命やったのだから……〟と喜びを感ずる余ゆうも出てきました。

ふり返ってみて、〝初めて〟も〝始まり〟もなんとすばらしいことか！と心から思います。

私のつい最近の経験、「動物園のおばさん」は、やはりまだ始めの段階です。小動物コーナーにモルモットとうさぎを出して、準備ができあがるころになると、午後ですと大体そのコーナーのまわりは、子ども連れの方たちで、ほぼいっぱいになります。大抵最初は、遠藤先生が大きなラッパのついたスピーカーで一応の説明を、きびしい中にやさしくなさいます。ところが先日、どういうわけか〝おまかせしますよ〟と先生がさっさと事務所へ引き上げてしまわれました。その時の私の姿は今思い出しても哀れでした。ようすを察して〝ヨーヨー〟などと拍手をする不届きな中年男性もいて、私はすっかりあがって、声も引きつる始末……でも〝私はひょっとしてまだまだ若いのかな〟と思ってニヤリとしたひとときでした。

公平について

津守真

どの子どもにも公平にするということは、教育の実際上の原則であろう。保育者は、常日ごろ、このことを心得ているであろうし、自分はどの子どもにも、不公平にはしていないと思っていることが多いだろうと思う。

ところが、ある時、ある機会に、子どものふとしたことばなどから、自分はもしかしたら、公平さを欠いていたのではないかと気付かされることがある。手がかからない、自分でやってゆける子どもだからと思い、その子を信用しているつもりで、積極的にふれることの少なかった子どもが、保育者のことを不公平だと思っていたりする。他の子どもには親切にして、可愛がるのに、自分だけ別扱いにされていると感じてひがんでいたりする。保育者は、そういうときに、がく然として自らをふりかえる。

そういえば、手のかかる子どもや、要求の多い子ども、保育者から見て問題の多い子どもには、よく相手もし、ことばをかけ、目をかけることが多かった。しかし、おとなしくて、全体を乱すことの少ない子どもには、声をかけることも少なかった。具体的な行動の上では、決して公平にしてはいなかったことに気が付く。そして、その気になって、その子どもとつき合うことを多くしてゆくと、その子どもとの人間関係を回復し、いままで見のがしていた意外な面を見いだすのである。手がかかることが少なかったというのは保育者との間のことであって、他のところでは、もっと荒れた面を出していたのかもしれない。そのことに気付かないで、公平にしていたと思っていた自分は、自分の公平さを主張して、子どもの片面しか見ていなかったことになる。

実際には、人間はだれにでも公平にするということは不可能な存在であると思う。むしろ、公平にできないところにこそ、人間生活が成り立っているともいえる。

それでは、保育者は、子どもたちに対して不公平にしていてよいのかというと、決してそうではない。できるだけ、どの子どもにも、ひとしく時間と労力と心をさくことをつとめることが必要である。公平であることができないのが、自分の現実であることを認めた上で、公平であることをつとめるのである。

意識の上で、自分はどの子どもにも公平にしていると思いこむことはやさしい、しかし具体的な行動をよく見れば、公平でないのが自分の現実である。その認識から出発するときに、どの子どもにもふさわしい公平さを作り出してゆくことができてゆくのではないだろうか。

幼児教育講習会

日本幼稚園協会主催

お茶の水女子大学附属幼稚園内
東京都文京区大塚二―一―一
（地下鉄茗荷谷、バス大塚二丁目下車）

本講習会を例年のように開催いたします。本年も昨年と同様に、第一部（午前の部）はお茶の水女子大学講堂、第二部（午後の部）は、お茶の水女子大学体育館で実習を主として行います。多少例年と異る点がありますので、ご注意の上ご参加ください。

第一部　午前の部（九・三〇より）　講演

会期　昭和五十年七月二十二日（火）―二十四日（木）の三日間

会場　お茶の水女子大学講堂

日程・内容

七月二十二日（火）――「三つ子の魂」
お茶の水女子大学教授　外山滋比古氏

七月二十三日（水）――「倉橋惣三先生の透導保育」
お茶の水女子大学教授　勝部　真長氏
同　大学附属幼稚園長

七月二十四日（木）――「これからの世界と日本の子ども」（仮題）
東京工業大学教授　矢島　釣次氏

第二部　午後の部（一・〇〇―四・〇〇）　音楽リズム実技

会期　七月二十二日（火）―二十四日（木）の三日間

会場　お茶の水女子大学体育館

内容　創造性を培う幼児の遊び
お茶の水女子大学・附属幼稚園関係教官

会費　第一部　一、〇〇〇円

第二部　一、〇〇〇円（印刷物代別）

会費は当日会員証（復のはがき）を呈示してお払いください。

申込期限　六月十五日付の消印分より受付開始

（それ以前のお申込はおことわりします）

但し各部とも定員になり次第しめ切らせていただきます。

申込み方法

●宛先　お茶の水女子大学附属幼稚園講習会係　東京都文京区大塚二―一―一（〒112）

●方法　一人につき往復はがき一枚を次の様式にしたがって記入し、復信の表に返信先の園名、園所在地、郵便番号を楷書ではっきりお書きください。

(1)　氏　　名
(2)　勤務園名
(3)　〃　　所在地
　　〃　　郵便番号
(4)　参加希望の部

（注）　はがきをタテにしてヨコガキで

（往信の裏面）

●往信はがき(4)の項に、ご希望の部をはっきりお書きください。

●第二部については、申込み順に会員を決定してしめ切ります。

●復のはがきの裏面に、こちらで会員証を印刷してお届けします。定員に達した以後の方にはその旨ご通知いたしますのでご了承ください。したがって、復のはがきの裏面には何もお書きにならないでください。

●第一部、第二部とも当日のお申込みはお受けませんのでご了承ください。

（注意）●往信復信をまちがえないようにおかきください。

●第二部受講の方は、運動に適した服装、靴をご用意ください。

●電話での申込みはおことわりします。

宿泊　ご希望の方は七月十五日までに左記へ直接申込んでください。（朝食付　一泊二、五〇〇円ぐらい）

つる家ホテル

東京都新宿区下宮比町十三（国電飯田橋駅東口）

電話　東京（二六〇）三三三六～九

おい抜かされる喜び
——教育の中における障害児差別について——

福井達雨

☆ 一柳満喜子先生

私は、清友園（現、近江兄弟社幼稚園）という、滋賀県近江八幡市にある、キリスト教主義幼稚園で、幼児教育をうけた。

ここに、園児から「オバチャン　オバチャン」とよばれている一柳満喜子という、先生がいた。

恐らく、この先生は、日本の幼児教育史の一ページを飾る優れた幼児教育者であると、私は、考えている。

満喜子先生は、九十歳近くでおなくなりになったが、この先生の、なつかしい想い出がいくつか、心に残っている。

お八つに、キントン豆がでてきた。

キントン豆は、豆より、おつゆの方が甘くて、おいしいものである。

私は、そのおつゆの魅力に耐えかねて、お皿に残っているおつゆを、長い舌を出して、ペロペロとなめてしまった。

これを見つけた満喜子先生は、烈火のごとく怒りだし、激しい言葉がとんできた。

「達ちゃん、行儀が悪いですよ。そんなことをするのは人間でなく、犬やねこです」

私の首に大きな鈴がぶらさげられ、二時間ばかりも、教室の片すみに立たされたのである。

幼稚園の窓のガラスふきをしていた。

そこに満喜子先生が来られ、そして窓のさんを指でスーッとさわされた。その指先に、ほこりがついた、とたん、

「達ちゃん、掃除というものは、目に見える所より、目に見えない所を美しくするものです。掃除は心でするものです」

と叫ばれると、私の持っていた雑きんをとりあげ、私の顔に投げつけられた。

中学生の時、満喜子先生のお宅で話をしていた。

私が、満喜子先生の気持ちを害するような、発言をした。

カッとされ、感情が思わず爆発したのであろう、自分のはいていたスリッパを持つなり、それで、私を激しく、うちたたかれたのである。

☆ 完全にむかって努力する

こんな、いくつかのエピソードが、今、なつかしく、心に残っている。

このことを想い出すたびに、私は、素晴らしい幼児教育をうけたと、誇りを感じるのである。

このごろ、私は、幼稚園や保育園の講演に出かけることが多くなった。

そして、何か、心さびしく帰ってくることが多い。

確かに、現代の幼児教育は、形がすっきりとし、赤、黒、青と色とりどりで、美しく、整然としてきた。

しかし、何かが欠けていることを思う。それは、子どもと先生が、激しく、身体をぶつけあって火花を散らし、汗を流し、涙を流している場面に出会うことが、少ないことである。

私は、激しい幼児教育をうけた。

満喜子先生は、激情の人であり、愛の炎ですべてを燃やしつくす人であった。

自分の持っている良点も、欠点も、すべての持っている人格を、幼い魂にぶつけ、人格移行の中で、自分の生活を、理想を、身体をとおして、ぶつけてくださった。

満喜子先生は、日本的な人格者ではなかった。時には、恐ろしさを感じさせ、このような感情的な人が、と思う時もあった。

しかし、私は、愛に徹した幼児教育者であったと思っている。

満喜子先生を、想うたびに、

「教育者とは、欠点の多い、弱い人間が、それでも、子供を完全にむけて努力させ、自分が完全にむけて努力する姿を持っているものだ、すなわち、教育者とは人格者像でなく、努力像なんだ」

こんなことを、強く教えられるのである。

満喜子先生から、強烈な心と人格をぶつけられ、それが、今、重い知恵おくれの子どもの教育をしている私に、いきづいていることを思う。

幼児教育者とは、素晴らしいものである。

☆ おい抜かされる喜び

先日、私が講演をしていると、会場の前列で、ポロポロと涙を流している老婦人が、おられた。

よく見ると、幼稚園時代の、S先生だった。

講演を終えて、S先生の手を握りながら、ご挨拶をした。

「久し振りです。なつかしいです」

「あなたが、講演台に立った時、弱虫で、意気地なしの達ちゃんが、こんな大きな会場で、よく話ができるのかと、心配で心配で心臓がドキドキして、顔があげられませんでした。

そして、話を聞いているうちに、あの達ちゃんが、こんな素晴らしい講演をするようになったと思うと、うれしくて、涙が止まりませんでした。

達ちゃん、立派になってくれましたね」

S先生は、また、涙を流された。

幼稚園の先生にとっては、どんな大の男でも、幼い時の姿が心に残り、生き続けているのであろう。

幼稚園の先生は、人間の心の故郷(ふるさと)である。

教育者の喜びとは、自分と共に歩んだ子どもたちに、おい抜かされる喜びであろう。

人間は、他者におい抜かされることは、苦痛なものである。そして嫉妬を感じ、劣等感を持ち、意地悪なものを動かすことが多い。

学校時代の友だちが、自分よりも出世したり、有名になると、〝学校の時は、私の方が成績がよかったのに〟などと思って、心おだやかでないものだ。

この愛は、嫉妬や劣等感を感じるエロスの愛である。

しかし、教育者は、教えた子どもが、自分の持っているものを、受けつぎ、そして自分をおい抜かしていくと「あの子は、よくオシッコをたれ、弱虫だったのに、有名になってくれた」「やんちゃな子だったのに、立派な人間になってくれた」と強い喜びを感じるものである。

嫉妬も、劣等感も感じない愛、これこそ、教育愛、アガペーの愛である。

☆ バカになれ

さて、私は、重い知恵おくれの子どもたちと共に歩みはじめて、二十四年を迎えた。

この二十四年間、私は、子どもたちから、一度も、おい抜かされる喜びを持ったことがない。

重い知恵おくれの子どもは、知的にも、心理的にも、機能的にも発達が遅れ、肉体的にも成長が弱い。

このため、将来、社会に出て出世したり、リーダーシップを持つことはないだろう。

このような意味で、この子どもたちは、私たちを、おい抜かすことはないのである。

また、止揚学園をやめていった子どもたちから、手紙をもらったこともない。「先生、こんなに立派になりました」「クラス会をしますから出席してください」「先生に教えてもらったことが、心に生き、感謝しています」

こんな言葉を、かけられたこともない。

教育者にとって、子どもたちからおい抜かされないことほど、寂しいことはない。

また、おい抜かされない世界は、刺激がなくマンネリズムにおちいりやすい。

この「寂しさ」と、「マンネリズム」を克服することが、障害児教育の姿勢を、決めていくのである。

私は、寂しさとマンネリズムにおちいった職員に、いつも大声で「バカになれ」と、どなりつけている。

「バカになれ」とは、先生側が、上の立場に立って、自分の次元にまで、子どもを引き上げようと無理をしないで、先生側が、子どもの中に下りていき、子どもの次元の中で、子どもの心を感じて歩んでほしいと、いうことである。教師側が、子供側に下りていく。この方向こそ、真の愛の姿勢であろう。

障害児教育とは、おい抜かされる喜びを感じる愛はなくとも、「バカになっていく」方向を持った愛は、育てることができる。

この愛を、バックボーンにして、重い知恵おくれの子どもたちと共に、歩み続けたいと、思っている。

☆ おわりに

幼児の教育誌に、教育の中における障害児差別について書かせていただき、これが、最後のものになった。

私は、幼児教育が、障害児差別をなくす、一番大切な世界であり、障害児の幸は、現代の幼児教育者、両親の姿勢にかかってい

ることを訴えてきた。

この長い間、いろいろと尽力をしてくださった、赤間峰子さんに、感謝したい。

一年ほど前、NHKラジオで、私の障害児差別に関する放送を聞かれた赤間さんが、「現在の幼稚園、保育園においても、障害児問題は、大切な教育の問題です」と、丁重な原稿依頼をうけた。それ以後は、私の方から無理にお願いして、書かせていただいた。

そのたびに、心あたたまるハガキを、何度も赤間さんからいただき、うれしく、また、励まされる思いであった。

発行者の津守真先生（一度もお会いしたことがありませんが）にも、心から感謝し、お礼を申し上げたい。

いつの日か、障害児が、胸をはって歩ける日本社会が生れ、個の連帯が充満することを、念じつつ、これからも、手に豆をつくり、額に汗し、教育の土方になって、歩み続けたい、こんなことを、心に秘めている私である。

（止揚学園）

幼児の教育　第七十四巻 第七号

七月号 ©　定価二〇〇円

昭和五十年六月二十五日印刷
昭和五十年七月　一　日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼発行者　津　守　真

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ一二ノ一
印刷所　図書印刷株式会社

110 東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所　株式会社　フレーベル館
振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

夏にむかって体力つけよう！

✲キンダーとびばこ（B） 3段 15,000円 4段 16,500円

3段　45×45×45㎝
4段　57×45×50㎝

✲キンダーとびばこ（A） 22,000円

60×70×35㎝

✲とび板 4,500円

（A）（B）共通

✲キンダードッジボール 6色1セット 5,600円

直径18.5㎝　赤・黄・緑・青・橙・白の6色。

✲キンダーカラーボール

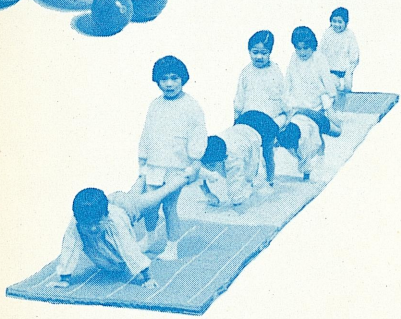
（大）直径 15.2㎝ 600円
（中）直径 12.7㎝ 540円
（小）直径 7㎝ 170円

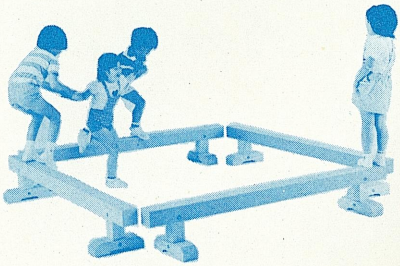
各赤・黄・緑の3色。

✲キンダーサッカーボール

3色1セット 3,800円

直径18.5㎝　白・橙・青の3色。





✲キンダーカラーマット 各色1枚 18,000円

180×90×4㎝　赤・黄・青・水・白の5色。

✲キンダースクエアーマット 35,000円

180×180×3㎝

✲キンダーマット（A） 14,500円

180×90×3㎝

✲平均台（固定式） 大 18,500円 小 16,500円

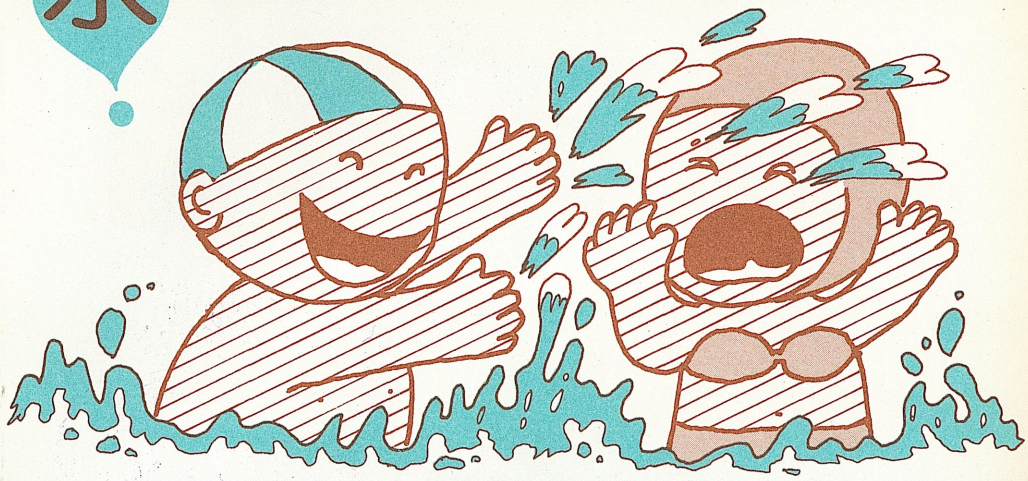
（大）250×35×10㎝
（小）180×30×10㎝
橙・黄緑・水・桃の4色。

✲平均台（組立式） 10,000円

200×18×（9.5㎝又は4㎝）に幅を変えられます。

★くわしくはフレーベル館代理店・支社・支店・営業所、または本社営業課　TEL 東京(03)292－7781(代)にお問い合わせ下さい。

水と遊んで元気な夏を！



⇩濾過装置
280,000円
3.2KW

⇩大型プール 115,000円
高さ45㎝　直径3.8ｍ
●ビニールタポリン、水色
シャワー２本・フットボール２個付

⇩グランドシート 34,800円
直径4.8ｍ
●ビニールターポリン、水色

⇧キンダープール(A) 92,000円
高さ45㎝　直径2.8ｍ
●特殊特厚ビニロン製、黄色

⇧魚つりセット 2,500円
魚15尾、つり竿５本
●プラスチック製

⇦ キンダーカラーすのこ
各色 10,000円
長さ180㎝　幅42㎝
●プラスチック製
赤・黄・緑・青の４色

くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所・または本社営業課　TEL 東京(03)292－7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館